
零崎問識の人間問答

裕月照星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎問識の人間問答

【Nコード】

N7063X

【作者名】

裕月照星

【あらすじ】

「零崎一賊」

——それは“殺し名”の第三位に列せられる殺人鬼の一賊。

「橙色の暴力」によって一賊が壊滅した四年後。元“死神”の希有な殺人鬼、零崎問識は“とある情報”を求め、請負人を営む戯言遣いの許を訪れる。そしてそれは、京都で繰り広げられる“祭りの再演”を意味していた！

※この小説は西尾維新著「戯言シリーズ」及び「人間」シリーズの二次創作です。

※この小説には両シリーズのネタバレが多量に含まれております。全巻をまだ読み終えていない方、これから読み終える予定の方、ネタバレが嫌な方にはオススメ致しません。

※筆者のブログ記事にて投稿した本作を、少し推敲、加筆したものですので、盗作ではありません。念為。

其の壱

1

ぼくがまどろみから意識を取り戻したのは、呼び鈴の鳴る音に気付いたからだった。

何だか、昔の夢を見ていた気がする。

四年前、あの鏡の反対側にいたあいつとの、他愛無い会話の記憶。

（今さらな気もするけれど、別に悪い事じゃないか）

しかしそれにしても、あれから、あの別れから、あいつとは全く会っていない。

音信不通である。

ケー番も知らないから連絡の取りようもない。そもそもあいつがケータイなんて持ってるかどうかも疑わしい。

とにかくそんな訳で、会っていない、のだが、

こんな唐突に奴の夢を見てしまうというのは、絆で結ばれているようで気持ち悪くもあり、また、何かの予兆のような気もする。

そんな、寝ぼけた頭で戯言を弄している間に、二度目の呼び鈴が鳴った。

ネームプレートを見直す時間はあつたはずだから、確実にぼくの部屋への来客だろう。

となると流石に、これ以上待たせる訳にはいかない。

「……起きます」

ぼくはソファーからもぞもぞと起き上がり、適当に戸に声をかけながら、ふと誰が来たのか考える。

時間は午前十時。

昨晩の調べ物が長引き、就寝が遅くなってしまったのが原因と言えは原因なのだが、結構な寝坊になってしまった。

まあつまり、この来訪者は別に非常識な時間帯にやって来る類の人ではないという事だ。

こうして呼び鈴を鳴らしている点からもそれは伺える。

しかし、ならアパートの住人かと考えてもその線は薄いと考える。もしみい子さんとかなら、そもそも呼び鈴を鳴らす前に「おい、いの字」と声をかけてきそうなものだ。

とすると、この来訪者は――

みたいに軽く思考しながら、魚眼レンズを覗く。

扉の前には、全身を紅に染めた人間が立っていた。

「……………」

しかし、哀川さんではない。

鍵開けスキルを持つ哀川さんならば呼び鈴なんか鳴らさず、勝手に入り込んでくるだろう。そして寝ていた僕の額に油性マジックで肉と書く程度の事は平気でやるだろう。

そもそも、目の前にいるのは男性である。

中性的な顔立ち、あちこちよじれているセミロングの灰髪、肩を大部分露出させた半袖ワイシャツの着こなし、ダメージの入ったシヨートパンツにビーチサンダル、背負ったナツプザック等等。

色々と個性的なファッションも、全身に滴る赤い液体のインパクトが帳消しにしていた。

そしてレンズ越しからも伝わってくる、彼自身から放たれる、殺気、殺気、殺気。

起きぬけに見るにはあまりに刺激の強い絵面だったために、ぼくは一瞬、言葉を失った。

戯言遣いなのに、言葉を失った。

「……しかし彼が顔見知りである以上、開けない訳にはいかない訳であって」

とりあえず、玄関先にこんな不審人物然とした人物を長時間放置しておいては、アパートの皆にも迷惑だしね。

ぼくは彼を部屋に招き入れるべく、扉を空けた。

途端に強くなる匂いと、殺気。

「やあ、戯言遣い」

「やあ、零崎問識くん」

一年ほど前に“依頼人”としてやって来て、以来何度か顔を合わせている殺人鬼。零崎問識。

かつては石風砥石と名乗り、いつかの崩子ちゃんの両親がらみの一件、闇口家の本拠地である大厄島での一件で、闇口家側に付いていた稀有な死神。

しかしその一件後、彼の持つ膨大な殺気が“零崎”のそれではないのかという意見が出た事で、零崎が島から逃亡する際に同行し、そのまま零崎一賊の一員となった。

そんな彼、零崎問識は、ぼくがいつまで経ってもつつこまない事に痺れを切らしたのか、自分から釈明を始めた。

「ああ、勘違い死ないでくれよ？　これは返り血という訳ではない。さっきそこで空から落ちてきたペンキを被って死まっただけだね。まあ、匂いで分かると思うが」

「……………」

どうでもいいよ、とか言い返そうかと思ったけれど、彼の意外な

鈍くさを思わせる釈明に面喰ってしまった。

抑揚のない、棒読みのような口調だが、そこには茶化すようなニ
ュアンスも感じ取れる。

全く以て、戯言だ。

「まあ、とりあえず上がるかい？」

「そうさせてもらうさ」

どんな用で来たのかはともかく、まずはシャワーを浴びてもら
う事にしよう。

全ては、それからだ。

登場人物紹介

零崎問識 (ゼロざき・といしき) -----
殺人鬼。

戲言遣い (ざれごとつかい) -----
請負人。

零崎人識 (ゼロざき・ひとしき) -----
殺人鬼。

零崎舞織 (ゼロざき・まいおり) -----
殺人鬼。

哀川潤 (あいかわ・じゅん) -----
請負人。

黒四館一 (こくしかん・はじめ) -----
験求者。

夢浮橋伊刈 (ゆめのうきはし・いかり) -----
下手人。

夢浮橋時宗 (ゆめのうきはし・ときむね) -----
下手人。

夢浮橋法師 (ゆめのうきはし・ほうし)
下手人。

西東天 (さいとう・たかし)
遊び人。

其の式

2

「ふう……。悪いね、君のシャツまで借りて死まって」

「構わないよ。一番安いやつだしね」

ぼくとしては、ペンキまみれになった他の服も替えて欲しかったが、そこは問識くんが頑として譲らず、ワイシャツだけ着替える運びとなった。

まあ、ペンキ臭さは幾分緩和されたから良しとしよう。

零崎問識。

彼はぼくが“請負人”になってから、最も付き合いのある殺人鬼と言っている。

問識くんと最初に会ったのは一年前。

彼のちょっとした困りごとを解決した事がきっかけで、以降度々ここを訪れるようになった。

「ところで、今日は——いつもの催促かい？」

「まあ、そんなところだ。近くまで来たついでに、新死い“零崎”の情報が入ってないかと思ってな」

彼の目的は、各地に“生まれているかもしれない零崎”に関する情報だ。

家賊の繋がりを「鬱陶しい」と言う零崎や、楽天家な伊織ちゃん（今は舞織ちゃんだったか）とは違い、問識くんはかなり、“零崎”の復興について真面目に考え、取り組んでいるのだ。

零崎一賊。

殺し名序列の第三位に列せられる殺人鬼の一族。血ではなく、流血によって繋がる、一賊。

だった。

四年前、西東天による“物語を終わらせる活動”に巻き込まれた零崎一賊は、たった二人を残して全滅してしまった。

零崎人識。

そして、無桐伊織。

しかしその後、問識くんが一賊に加入した事によって、未だにどこかで“零崎”が生まれ続けているという可能性が生じた。

そこで、一賊の一員となり、この説の生き見本となった問識くんは、一刻も早く“零崎”を「殺し名」の勢力として通用する程度にまで人数を増やす事に尽力しているのである。

まあその件に関してぼくが問識くんに与える事ができた情報は少ないんだけど、それでも彼は、ぼくに一目置いてくれているのか、時々こうして情報の催促にやってくる。

「うーん、まあいつも通り、疑わしい人が何人かいる程度なんだけど、いるかい？」

「ああ、全部もらっていいこう」

また、しらみつぶしに調べるつもりなのだろう。

ぼくはいつでも渡せるようにまとめておいたファイルを取り出し、問識くんの方へ渡した。

内容は大部分、ぼくが個人的に調べたものだけど、他の情報元に軽くお伺いを立てて得た情報もある。

まあほとんどが、表世界の情報である。

そしてそれこそが、問識くんの欲しい情報でもあるようで。
問識くんは普通の世界の情報に疎く、ぼくは暴力の世界の情報に疎い。

だからこうして顔を突き合わせるのも、お互いの情報交換、ギブ&テイクの関係でいうとういう、一種の取り決めみたいなものだ。
問識くんが資料に一通り目を通し、ナップザックに入れた頃合いを見計らって、ぼくは話しかけた。

「最近調子はどうだい？ 零崎とも会ってたりする？」

「……いや、相変わらずだ。なかなか見つからない死、捕まらない」

見つからないのは新しい“零崎”の家賊で、捕まらないのは零崎人識の事である。

他の“零崎”と知り合って以降も、ぼくがあいつの事を零崎と呼んでいるため、問識くんは両方の意味で答えてくれたようだ。

まあ、ぼくが呼び方を変えればここまでややこしくはならないんだけど、あいつを名前で呼ぶのも違う気がするのだ。

「レンの奴、この所めつきり捕捉できなくなって死まっている。マイも焦っているようだったな。まあどちらに死ても、僕から見れば、二人とも道楽に耽っているように死か見えないけどね」

全くこちらは同胞探死で忙死というのに、と、ブツブツとつぶやく問識くん。

「……レン？ それは、零崎のことか？」

「ん、ああ。レンは人識兄のことだが」

「マイは舞織ちゃんだから分かるんだけど、何であいつがレンなんだ？」

ん？ と、問識くんは小首をかしげていたが、すぐに「ああ、お前の前でこの呼び名を使ったのは初めてだったか」と納得したよう
で。

「いつだかの家賊会議で、“零崎”復興の一環として、僕と舞織、そして人識兄の三人で、新・零崎三天王として君臨しようという話になったんだよ」

「……………」

零崎三天王。

前にちらっと聞いた気がする。

そして「もう一人ぐらい頑張れなかったのかよ」と盛大に突っ込んだ気が……。

「それでそれにあたって、かつての三天王、つまりは『自殺志願』
の零崎双識、『愚神礼賛』シームレスバイアスの零崎軋識、『少女趣味』ボルトキープの零崎曲識の
三人を、可能な限りリスクペクト死しようという事になった」

「……………」

一応、最後まで聞こう。

ツツコミはそれからでもいいだろう。

「さ死あたって、まずはお互いの呼び方を変えようと言う事になっ

た。あの三人はそれぞれ、通り名を文字ってカタカナ二文字の呼称で互いを呼び合っていたら死い。そうする事で互いの信頼や親死みが増すという事でな」

軋識は、アス。

曲識は、トキ。

そして、双識はレンと呼ばれていたらしい。

「色々と相談死た結果、舞織は双識の大バサミ『自殺志願』を受け継いでいるから、そこから二文字を取って“マイ”に死ようという事になった。女の子ら死いと、本人も気に入っていた。で、問題は僕と人識兄だ」

……聞きながら考えた事だけれど、恐らくこの“相談”、問識ちゃんと舞織ちゃんの二人で行われたものだろう。
仮にあいつがこの議論の場にいたとしても、無視か、ツツコミ役かしなかっただろう。

そして問識くん、何気に舞織ちゃんと意気投合しているように、思われた。

「呼び名を決めるにしても、僕と人識兄にはまだ通り名が定まっていなかったから、そもそもネーミングの材料となるものを持っていなかったんだ」

「……………」

「まあ僕の方はその後、僕専用の武器『刀狩令』ピーストリートを手に入れたから、“リト”という名前に決まったんだけどね」

「……うん、覚えてるよ。君が初めてぼくに持ち込んだ案件がそれ

だったからね」

もしかしてその渾名を決めるためだけに、ぼくにあの依頼を持ちこんだのだろうか？

あんな、あんな依頼を持ちこんだのだろうか？

いやまさかそんな事は決して絶対断じてないだろうけど……。
まさか……ね。

問識くんの話は続く。

「そ死て肝心の人識兄の方だけどね。頑と死て一つの武器を持ってくれなかったんだ。まあ、プレイヤーと死ては真っ当だけど、そこは零崎三天王としての様式美が重要だと言う事を、あの男は結局最後まで理解死なかったんだ」

まあ、あいつはそうだろうな、とぼくも思う。

最初に会った時も、あいつは多種多様、雑多な刃物を持っていたし、後に聞いた話じゃ、その時点で曲弦糸まで会得していたらしいし。

あいつの場合、武器は鋭く切れさえすれば、それで良かったんじゃないかと思う。

「だから結局已む無く、人識兄の通り名は武器の名前ではなく、兄自身の通り名という事に死た」

苦渋の選択だった、と。

問識くんは無表情ながら、拳をぐぐつと震わせて言った。

「それで改めて人識兄自身の通り名と死て、どんな呼び名がふさわ死いかと考えて、マイが提案死たのが――」

まあ、察しはついた。

ぼくは舞織ちゃんとも面識があるし、ぼくが“その呼び名”の元ネタという事も知っているようだった。

十中八九、あの四文字だろう。

あいつがぼくを「欠陥製品」と呼んだのに対し、ぼくはあいつを、こう呼んだ――

「『ロストフレンド人間失格』という通り名だ」

「何か変なルビ振ってるっ!!?」

思わず突っ込んでしまった!

いや、これは突っ込むという方が無理な話だ!

ロストフレンドで!

ロストフレンドでっ!!

「愛称の方も、ロストフレンドの間を取って、レンに決まった」

「いや、そこは言われなくても分かるけど!!」

ひでえ……

ひどい通り名だ……。

何がひどいって、それがいずれ暴力の世界に流布される事まで見越して、そんな通り名を一方的に決めてしまった問識くんと舞織ちゃんが!

でも、『人間失格』の方はぼくが付けた訳だし、半分はぼくのせいかもしれない。

しかし弁解させてもらえるなら、ぼくだってこんなルビが振られるとは思ってなかった訳だから、その辺りは情状酌量の余地はあつていいと思うんだ！

「“変な”とは。戯言遣い、いくら何度か世話になった君とは言え、今のは聞き捨てる訳にはいかない台詞だ」

途端に膨張する問識くんの殺気。

しかも、今はその殺気を拡散させず、集束させて、ぼくのみ目掛けて放射しているようだった。

（気に入ってたんだね……。そうなんだね……）

まあ、多分これは、

“零崎”の長兄だった双識さんの呼び名と、現在の“零崎”において長兄のポジションにある零崎を、同じ“レン”という呼び名にする事に、何かしらの思い入れがあったのかもしれない。

果たしてそれは、問識くん自身の思い入れか。舞織ちゃんの思い入れか。百万分の一の確率であいつの思い入れかもしれないけれど。

とにかくどうやら、ぼくは地雷を踏んでしまったらしい。

戯言遣いとして、不覚と言わざるを得ない。

今こうして話している相手は“零崎”だ。何度か情報交換をした仲とは言え、そんなものは油断する要素足り得ないはずだった。

……まあ怒らせた理由が理由だけに、いまいち釈然としない感があったが。

このどうにも間の抜けた、しかしさりげなく危険度の高い状況が、

次の瞬間に一変した。

「おいおいその色男。何いーたんに熱烈な視線送っちゃってんだ？」

「!?!」

「!?!」

背後から聞こえた勝気な声で、辺りの空気は一瞬で塗り替わった。赤色に。

ぼくは咄嗟に振り返り、問識くんは殺気をそちらに向け直し、左手をナツプザックの中に突っ込んだ。

彼の得物を、すぐ取り出せるように、だろう。

ぼくの、背後。

今の今まで閉まっていたはずの、窓が開いていた。

そして、その上部から蝙蝠のようにぶら下がっている彼女は、全身が赤かった。

さっきまでの問識くんのような、血がしたった様相とはまるで違う。

髪も、スーツも、彼女をコーディネートする全てが全て、燃えるような、赤色。

「このあたしからいーた人を略奪しようってなら、覚悟しろよ、零崎くん？」

人類最強の請負人、哀川潤が、決め顔でそう言った。
逆さまのままです。

其の参

3

「……お久しぶりです、哀川さん」

「潤だ。あたしを苗字で呼ぶんじゃない。あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだ……って、このやり取りも何か懐かしいな」

「ですね」

最近はこちらと名前で呼んでいたから、こうしてからかうのは久しぶりだった。

「つーか、前に会ってそんな経ってねえだろ？」

「んー、まあ、そうかもしれないね。潤さんにしては、短いスパンでの再会でした」

一応今は、最後にあの展望レストランで会ってから、2ヶ月後くらいという設定だ。

「あれからどうよ？ あの子高生ちゃんの案件は解決したか？」

「ええ。まあ潤さんの予言通り、少し危うい場面もありましたけどね。概ね、落ち着く所に落ち着いて、今はアフターケアをみいこさんをお願いしてるって感じですね」

「ふうん。みーちゃんも元気そうで何よりだな」

「……いつの間にみいこさんとそんな愛称で呼ぶほど親しくなったんですか哀川さん」

一生に一度はそんな風に呼んでみたいというぼくの願望を軽々とクリアしやがって。

「あん？ 別に友達を何て呼ぼうがいいじゃねえか。つかまた苗字呼びしやがったな？ どんだけみーちゃん好きなんだよお前。玖渚ちに言いつけてやろー」

「いや、友も普通に知ってますよ……」

今では友もみいこさんに懷いて、むしろぼくと友でみいこさんを奪い合っている状態だった。

と言うか、同棲してるの知ってるだろうに。

「ま、冗談はこんくらいにしてだ……」

と、哀川さんはここでぼくの後ろにいる、問識くんの方へ目をやった。

哀川潤。

人類最強の請負人。

暴力の世界では『赤き制裁』《オーバーキルドレッド》、『死色の真紅』、『砂漠の鷹』《デザートイーグル》等の異名で呼ばれ、全てのプレイヤーから恐れられる、生ける災害みたいな女性である。

それは当然、問識くんにも当てはまる訳で。

いや、零崎一賊にとって、哀川潤はそれ以上に大きな意味を持つ
“障害”であるはずで。

「よお。こんな所で鉢合わせするとは奇遇だな。零崎、問識くん？」

哀川さんが凄みのある笑顔を見せながら言うと、問識くんから放
たれる殺気が、更に密度を増した。

より集束され、より出力を増した殺気が、哀川さんに向けられる。

この部屋が、物々しい緊張感に支配されていく。

人類最強。それはハツタリでもなければ誇張でもない。

その肉体の強度も、有するスキルも、何よりそのメンタルが、嚴
然たる事実として最強なのである。

だからほとんどのプレイヤーは、彼女と遭遇した時点で、一も二
も無く逃げに入る。

勝てないから。

勝てるはずが無いから。

そして暴力の世界で負ける事は、そのまま死を意味する。

なのに、問識くんは、逃げない。

溢れんばかりの殺気に向け、一步も退こうとしていなかった。

そんな問識くんの様子を見て取ると、哀川さんはクククと不敵に
笑った。

「あたしもよお、最近是人識君や伊織ちゃんと慣れ合ってきたちゃっ
て、特に伊織ちゃんとはたまにテニミュ観に行く仲にまでなっちゃ
って、零崎ってのに対する嫌悪感とか、偏見みたいなのも大分薄れ
てきちまってただけだよお。お前見てるとホント、思い出させて
くれるよなあ」

恐れを知らない、殺人鬼の恐ろしさを。

ホント、いかしてんぜお前。

舌舐めずりをしながらそう言う哀川さん。

正直、もしその笑顔を向けられているのがぼくだったら、一目散に回れ右しているだろう。

逃げ切れないと分かっているけど、逃げ出していただろう。

零崎問識。実はぼくは彼の強さがどれ程のものをあまり分かっていたなかったんだけれど。

哀川さんにこんな顔をさせる程の、実力者だったのか。

改めて、さっきの空気が危険だった事を実感した。

「ところで潤さん、いつまでもそこでぶら下がってないで、こっちに入ってきたらどうです？」

そう。彼女は未だ、窓の上から逆さまになった状態なのである。ロープで吊るされてるんだか壁につま先をめり込ませてるんだか分からないけれど、この状態のまま話し続けるのは絵面的に締まらない。

何より、哀川さんも哀川さんで、ここまで出向いている以上、ぼくに用件があるはずなのだから、とりあえず落ち着いて話を聞ける場を作らなければならない。

一里塚さんではないけれど、ぼくなりの空間製作である。

しかし哀川さんは、少し躊躇するように「あー……」と言いながら頬をポリポリと掻いている。

「どうしました？」

「いや、あたしはここでいいよ」

「何言ってるんですか。せっかく来てもらったのに、そんなぶら下がったままにさせておく訳にはいきませんよ。ちゃんともてなさせて下さい」

「あーまあ、そうなんだけどさ、ホラ、あたし、踏み込んだ建物は例外なく崩壊するってジンクスあるし」

「……そんな設定まだ残ってたんですね。とにかく入ってくださいよ」

「いやホラ、前の骨董アパートの時もそうじゃん？ この塔アパートまで潰す事になったら、いーたんはともかく玖渚ちんとかみーちゃんとか崩子ちゃんにも悪いし……」

「……と言うより、そのジンクスって、だいぶ穴がありますよね」

四年前の例を挙げるなら、鹿鳴館大学とか、ぼくが月一ペースで通ってた病院とか。

そもそも骨董アパートの時だって、訪れてから崩壊までかなりタイムラグがあるし、直接の原因も哀川さんにはない。

第一、そのジンクスが本当なら、今ごろ京都駅のロイヤルホテルも倒壊していなければならぬ。

「それにそんな事言ったら、建物なんて時間が経てばいつかは崩壊するんですから、ジンクスなんてあっても無くても同じようなもの

ですよ」

「あっても無くても同じ、ねえ。親父みてえな言い方しやがって。まあ、いーたんがそこまで言うならそう思ってみる事にすっか。あのジンクスは、若気の至りだったっつー事で」

そんな風に一人ごちながら、哀川さんは窓の棧に手をかけて、手を支点にしてぶらさがるように身体を正位置に戻した。

そして足を部屋の方へ入れ、そのまま棧に座るような姿勢を取った。

足をぶらぶらさせている所を見ると、そこを定位置にしたいようだったので、ぼくは何も言わなかった。

大方、ヒールを履いたままだから、土足で部屋に入るのは憚られるし、かと言ってわざわざ脱いで玄関まで置きに行くのも億劫とか、そんな理由だろう。

とりあえずそこまで見たぼくはキッチンからマグカップを三つ取り出し、ペットボトルのお茶を注いだ。

お湯を沸かしていなかったし、哀川さんもそんなに時間がある訳じゃないだろうから、とりあえず速度重視のセレクトだった。

二人にカップを渡して、問識くんに座るよう勧めようかと思ったけれど、やっぱり哀川さんへの警戒が解けないようだったから、無理強いするのは止した。

とりあえずこの場合は、早く収めた方が良さそうだ。

「それで潤さん、今日はどんな冒険譚を聞かせてくれるんですか？」

「ああ。今日はとびきりの冒険を用意してきたぜ、いーたん」

冒険譚ではなく、冒険と、哀川さんは言った。

つまり、ぼくに何かをさせる気なのだろう。

ぼくは手早く、腹をくくる事にした。

それに、と、哀川さんは問識くんの方を見ながら言う。

「想定外のゲストっちゃあゲストだが、これはむしろ幸運だったかもしれないねえな。今回の冒険は、参加人数に上限は無えんだ」

ニヤリと笑う哀川さんに対して、無表情ながらより殺意を膨らませて、問識くんは憮然とした口調で返す。

「……どう死て僕がお前に協力死なくてはならない。死色の真紅」

「べつに協力してくれなんて、あたしは一言も言ってねーぜ？ ただ参加してくれるだけでいい」

「……………」

「つつてもまあ、いーたんなら、今回のあたしの企画について、察しはついてるかもしれないねーけどな」

そんな風に言いながら、哀川さんは話し始めた。

問識くんの意思も聞かずに、勝手に。

「お前ら、今京都で起きてる連続殺人事件については、当然知っているよな」

「……………」
「……………」

ぼくも問識くんも何も言わなかったけれど、当然、知っている。そもそも昨夜ぼくが調べていたのもその事件についてだったし、問識くんも、その件が“零崎”に関係しているのかを確認するために、京都まで足を運んだのだろう。

「今ところ被害者は5人ほど。それぞれ全く接点のない一般人が、短いスパンで殺されている。しかも——」

「その死体はことごとく、原型を留めないまでに解体されている」

ぼくが引き継ぐと、哀川さんは合いの手の如く、指をパチンと鳴らす。

「ああその通り。この事件、このまま放置しておけば十中八九、最終的な被害者数は12人になるだろう」

それより多くも少なくもない、12人。
その数字には、大きな意味があった。

今起こっている事件は、何から何まで、同じだったのだ。

かつて京都を震撼させた、連続通り魔事件に。

殺人鬼、零崎人識によって、総計12人の一般人が無差別に殺され、解体された事件^{バラ}。

今現在、それと全く同じ殺され方、しかも同じ間隔で、人が次々

に殺されているのである。

犯人は目下、正体不明。

同一犯なのか別人による模倣犯なのか。

全てが不明。そんな、事件。

ぼく自身もそれについて独自に調べてはいるが、今の所、犯人の手掛かりすら掴めていない。

「四年前の悪夢の再来ってことで、沙咲の奴も参っちゃっててね。今度は全てが終わる前に解決して欲しいってんで、あたしに話が回ってきた」

ただな、と、哀川さんがぼくを見ながら言う。

「ただ解決すりゃいいんだったらあたしだけでも十分なんだが、今回は人識くんの時と違って、前例がある分、殺しの意味合いが違ってくるんだよな」

殺しの意味合い。

つまり、犯行の動機だ。

前回、つまり四年前の通り魔事件での零崎の動機は、哀川さん曰く「自分探し」だったらしい。

心無き殺人鬼が、人の中にある“心”を探して、色々な人間を解剖していたのと言う。

……ぼくがその話を哀川さんから聞いた時、色々と思う所もあったのだけれど、「まあ零崎だし」という事で、割合納得できた。

ただ、今回は、そんな思春期の度を越したセンチメンタルな気まぐれみたいな動機だけでは説明できない、不可解さがある。

「まあ、あたしもその話聞いてからちよろつと心当たりを調べたんだが、どうやらこの件、ただの狂言じゃなさそうなんだよな」

この人類最強がそう言うからには、確かにそうなのかもしれない。

少なくとも、彼女が身内を巻き込もうと思う程度には、面白い話なのだろう。

哀川さんは、ちらりと問識くんの方を見てから、言った。
今回の冒険の内容を。

「この、零崎人識の模倣犯の確保。お前らにも参加してもらおうと思っ
てよ」

其の肆（前書き）

今回から、語りが『人間』シリーズ風味になります（

其の肆

4

という訳で。

現在、零崎問識は、京都の街をぶらぶらと適当に歩いているのだ
った。

目的は、京都連続通り魔事件の犯人、零崎人識の模倣犯を見つけ、
無力化する事である。

あまりに強引かつ自然な流れだったためについぞ言うタイミング
を逃してしまい、喉の奥につかえていた言葉を、問識は一人、つぶ
やく。

「……どう死てこうなった」

ひとまず、歩きながら原因を考えよう。

こうなった原因。

先ほどの、戯言遣いの家にやって来た哀川潤から持ちかけられた、
さそい話。

「つか、今回の連続殺人な、犯人は分かってんだよ」

振り返ると、この言葉から、全てが妙な方向へ流れていったような気が、問識にはするのだった。

聞いた時には、ただ意外に思うのと、ならば何故この人類最強は戯言遣いにこの話を持ちかけたのか、と疑問を抱く程度の認識だった。

「それで、その犯人というのは――」

戯言遣いが問うと、哀川潤は溜める事もせずさらっと言った。

「あたしの親父だよ」

「……!!」

人類最強の、父親。

それはつまり、かつて四つの世界を崩壊寸前まで追いやった“大戦争”の首謀者であり、その後の“物語を終わらせる活動”において、人類最終『橙なる種』を使役し、零崎一賊を壊滅に追いやった元凶。

人類最悪の遊び人、西東天のことではないか。

問識自身は直接その男と接触した事は無かったが、その荒唐無稽な最悪さは、人識兄から聞いている。

“零崎”として、因縁の敵である。

しかしそれ以上にその男と因縁があるのは、戯言遣いの方である。何しろこの、戯言遣い。

殺し名でも呪い名でもなく、ただの普通の世界に生きる一般人でありながら、西東天から、物語の終わりを見るための“敵”として位置づけられたのだから。

しかも、魍魎魍魎、裏の世界の際物ばかりを集めた西東天の手足『十三階段』を、実質一人で崩壊させ、ついには敗走させるに至った。

聞いた話では、その後も西東が何かする度に、この戯言遣いが乗り出して計略を悉く退けるという関係が、四年前の決着以来、ずっと続いているらしい。

戯言遣いにとって、西東天は、永遠の宿敵なのだ。

だからこそこの赤色は、戯言遣いにこの話を持ってきたということか。

哀川潤の話を聞いて、戯言遣いは多少驚きこそすれ、すぐに「まだですか」とぼやいた。

「ああ。またぞろ、変な破壊活動の一環だろう。あたしも他の仕事してる合間に掴んだ情報が無きゃ、こんなすぐには気付けなかったぜ。今回はいつも以上に、無計画に突拍子なく始めやがったみたいだよ」

そうしてその結果が、無差別殺人か。

はた迷惑にも程があるな。

と、問識はぼんやり思う程度だったが、戯言遣いはどうやら、腑に落ちない点があるといった風にうなっていた。

「つい事で、いーたんにはあたしと一緒に、親父探しを手伝ってもらおうと思ってな。長年あいつと付き合ってきたお前の経験を、貸して欲しくてな」

「……分かりました。狐さん絡みとなれば、ぼくは是が非でも動かせてもらいます」

「それで、きみにはだね、問識くん」

もはや完全に、この女の中で問識は参加決定らしい。

しかも腹立たしい事に、問識自身、この件に参加する事に異議は無かった。

一賊を屠った人類最悪に一矢報いる機会など、早々あり得ない。
零崎一賊は、“仇”を絶対に許さない。
ここで動かなければ“零崎”ではない。

おそらく哀川潤は、話を聞いて起こるであろう、問識の心情の変化を読んでいたのだろう。

掌の上で転がされる感覚が、忌々しい。

「実際に街に出て、殺して回ってる下手人を、適当にぶっ飛ばしてきて欲しいんだよ。ホントはあたしが出張って、親父の捜索はいーたんに任せようかとも思ってたんだけど、問識くんがやってくれるってんなら別にいいかなーって」

どうだ？ と。

哀川潤は、零崎問識に、問うた。

別に、頼まれるまでもなかった。

その程度の事ならば、問識にとっては日常であるし、そもそもそれ以外に出来る事も、やろうと思える事もない。

狐の居場所を戯言遣いが探すというのなら、その間に自分は露払いをこなし、狐が見つければその場に乗りこんで、獲物を横取りしてしまってもいい。

全ては自分のため、ひいては零崎のためである。

だから断じて、哀川潤の言いなりになるという事では、ない。

そして、現在に至る。

適当に京都の街をぶらついている、現在に至る。

連続殺人が起こっているというこの街を歩いていれば、下手人はそのうち必ず問識を標的にするだろう、というのが哀川潤の見解だった。

「あのクソ親父のために動こうって奴らだ。事を起こしてる最中に本物の零崎に登場されて、場を乱されたくないと思うはずだ」

だから、適当に街を歩いているだけでも、下手人の方から接触してきてくれる、と。

ある意味、死色の真紅が出向くよりも効率的という訳だ。

哀川潤の見解はもっともだと、問識は普通に思う。

思うが、それは利用される事への苛立ちを伴わない訳ではない。

「つまり、僕が戯言遣いのところへ行った事が、そもそもの間違いだったのか」

回想を終え、今の自分が取っている行動を客観的に見て、問識はそう結論づけた。

「別に僕は戯言遣いの所へは行かず、適当に街をうろついているだけでも、結果は同じだったんじゃないのか」

そうすれば、情報の有無という違いこそあれ、最終的に得られる戦果は同じだったのではないか。

最初から問識は、今回の模倣犯が新しい零崎の仕業ではないのかと気になったが故にこの京都まで来て、戯言遣いのところへ行ったのは、本当について程度の気持ちだったのだ。

情報欲しさに早々に戯言遣いのところへ行ってしまったが故に、無駄に哀川潤と邂逅し、無駄にムカつく事になってしまったのではないか。

街中を一人でぼーっと歩いている今、そういう感想が頭から離れない問識である。

道行く人々は、少ない。

流石に四年前にも同様の連続殺人が起こっただけあって、一般人はかなり外出を避けているようだ。

そしてそれでも外を出歩かなくてはならない人々も、問識には決して近づかない。

今問識は、殺気を拡散させて放っており、わざと敵に見つかりやすくしている。

問識の殺気は、常人にも感じられるほど密度の濃いそれであるし、そうでなくとも、彼の赤く汚れた服装や髪などを見れば、一目で不審人物と分かる。

故に、問識の周囲に、一般人の姿は人っ子一人見当たらなかった。逆にそれは、戦い易いフィールドになっているとも言えよう。

しかしそんな中、敵が現れるまではただ歩くしかない問識にとって、ただの無駄で退屈な時間であった。

「……マイに、連絡でも取ってみるか」

問識が不意に思いついたのは、その無駄な時間の最中であった。

今回の闘争は、零崎一賊の“復讐”という意味合いも兼ねている。ならば、同じ家賊である舞織にも、闘争に参加する理由がある。

下手人を相手取るのには自分一人でも充分事足りると思うが、何せ今回の背景には人類最強と人類最悪がいるのだ。

いざという時、戦力はできる限り多い方がいい。

「それに、せっかく“敵”に接触する前に得た情報だ。有効に活用するべきだな」

それこそ、戯言遣いの元へ行ったのに行かなかったのとで、大きく違ったファクターの一つである。

敵の手の内、とまで言わずとも、敵の姿がはっきりしているのは、戦いにおいてかなりモチベーションが向上する。

それが零崎にとっての“仇”と分かっているならば、尚更だ。

かと言って、それだけでは哀川潤から被ったストレスに比べれば釣り合うようなものではないが、これに“舞織との事前連絡”を加

えれば、とんと言つてもいいかも知れない。

とりあえず、せっかく思いついた名案を実行に移すべく、問識はパンツのポケットから携帯を取り出し、舞織の番号をダイヤルする。

数回のコールの後、明るい女の声が響いてきた。

『もしもおーし！ どうしたんですかどうしたんすか！？ リトくんからかけてくるなんて珍しいじゃないですか！！ 天変地異の前触れですか！？ 世界がラグナロクを迎えたですか！？ うなー！』

「……………」

相変わらず、テンションの高い姉だった。

四年前からほとんど変わらず、このキャラクターだ。

「まあ、近からず遠からず…………いや、むしろそれでほぼ正解だな」

『マジですか！？ いや、確かに久々のリトくんからの電話ではっちゃけ過ぎたきらいはありましたけど、そこまで冗談に乗ってくれなくてもいいですよ？ 無愛想な鉄面皮キャラこそがリトくんの売りなんですから！』

「いや、別に僕は……………」

『あ、そう言えばリトくん、戯言遣いさんに会ってるとか行っちゃったよね？ もしかしてそれ関連ですか？ またぞろ変な仕事の手伝いを頼まれちゃったから、わたしに押し付けたいなあと思っ

ちゃってます？』

「おい……」

『いやあ、可愛い弟の頼みでしたらこの舞織ちゃん、何時でも何処でも何度でも馳せ参じる所存じゃありますけれども、ことが戯言遣いさん絡みですからねえ、ここはただで協力するというのは姉として面白くないですし、弟を甘やかすような行為は慎まなければなりません！』という訳でリトくん、「お姉ちゃん大好き愛してる！」と情感たっぷりに3回言ってくだされば、そのお願い聞いてあげなくも——』

「とりあえずお前は人の話を聞け！」

強い口調で言ってしまった。

まだ哀川潤の影響でピリピリしていたのもあるが、このまま姉の暴走を許していたら、本題に入る間もなく携帯の電池が切れかねない。

とは言え、立場上“姉”とは言え、年齢はこちらの方が上なのだし、少し大人げなかったかもしれない。

案の定、電話先の舞織は少しショックを受けているようだった。

『……うう、弟に怒鳴られてしまいました。これより零崎舞織ちゃんの手首を切ります』

「この程度で自決死ようとするな」

それに、お前の手首は義手だろうが。

『むおっ、き、切れません……！ 自殺志願まで使っているのに……！』

「何で本気で切ろうと死てるんだ……」

舞織の腕は罪口製の義手で、かなり高価な代物らしい。

四年前、闇口憑依にその接続を切られたものの、今では充分に定着し、生身の腕も同然に扱っている。

『なーんちゃってー！ 実はそんな事してませんようー！ 心配しましたかー？ お姉ちゃんの事心配してくれましたかー？』

「……………」

ああ心配したさ。

主に頭を。

とは言え、そういう嫌味すらポジティブに捉えてしまうこの姉に對しては、ノーリアクションを貫いた方が効果的なので、わざわざ言ってやる事もしない問識である。

『んんーどうしましたリトくん？ 急に黙りこくっちゃって、お腹でも痛くなりましたか？』

「……………」

『え、えっと、い、いないいない、バァー！ みたいな？』

「……………」

『…………う、うなー？』

⌈
⋮
⌋

『……うう』

.....

『うわあああんごめんなさいごめんなさいごめんなさいちゃんとり
トくんの話聞きます調子乗ってましたおフザケが過ぎましたもうホ
ント心の底からすいませんでしただからお願いですから何か喋って
くださいようお姉ちゃんを見捨てないでええええええ!!』

「……はあ」

とりあえず、

聞こえがよしに溜め息を発する事で、諸々の姉の発言を許す事にした問識である。

零崎舞織。

元の名前は、無桐伊織。

殺し名でも何でも無い、普通の女子高生だったらしい。

零崎双識によってその才能を買われ、彼の死に目にあつて、彼の得物『自殺志願』を受け継いだのだという。

今は義手になっている両腕も、その時の抗争に巻き込まれて失ったらしい。

こんなお気楽に振舞っていても、有する過去は、壮絶だ。

そしてどうやらこの女、零崎になる前にもなった後にも、年下の兄弟というのを持った事がなかったらしい。

無桐であった時も三人兄妹の末っ子だったそうだし、零崎になった後も、最後に覚醒した以上末っ子である事には違いなかった。

零崎問識が、家賊になるまでは。

便宜上とは言え、自分が「弟」と呼べる存在が出来た事が、舞織にとって殊の外嬉しかったようなのである。

……いや、年齢で言うなら問識の方が上ではあるのだけど、「零崎に加入したのは問識くんの方が後なんだから弟でいいじゃないですかっ!!」と涙ぐみながら訴える舞織に、問識の方が折れてしまったのである。

そんな訳で、舞織は事ある毎に問識を弟として猫可愛がりするのである。

零崎の一員となった事で、一応でも家賊を大事にしようと考えている問識としては、迷惑至極極まりないものの、それを強制的に止めさせるような事も言いだせずにいるのだった。

「まあとりあえず、聞くだけ聞いてくれ。あんたがどう動くかの最終決定は任せるから」

ともかく、時間のロスでしかなかった掛け合いを切り上げ、問識は本題を手短に説明した。

『なるほど……。戯言遣いさんだけでなく、例の狐さんや哀川のおねーさんまで……。それは怖かったですねーよしよし』

「おい、いい加減その“よ死よ死”止めないとプツンするぞ」

『うわっとお、しまったですね。前にもそれやって『ピーストリート刀狩令』振りまわされたの忘れてました』

「……あんたももうすぐ二十歳だろう。そろそろ落ち着いてくれてもいいんじゃないのか？」

『ええーまだいいじゃないですか。他の弟も妹もまだ見つかりませんし、もう一人二人増えたらクールで頼れるお姉ちゃんキャラで推していく予定なんですよう』

「……………」

姉として色々と、試行錯誤しているようだった。
無駄な努力だと言わざるを得ない。

『それはそうとリトくん、情報ありがとうございました。話を聞く限り、リトくんは結構危険な状況にある事も分かりました。ただですね……』

「ん？ 何かそっちにも問題があるのか？」

『はい、実はわたし、今“敵”と遭遇しているのです』

「……敵？」

『多分そちらの事情とは関係ないと思うんですけど、ちょっと因縁ふっかけられちゃいまして、ここを切り抜けるのは骨が折れそうです』

「……そうか」

まあ、四年前ならいざ知らず、今の舞織は身体的にも“殺し名”

と比べて遜色ないポテンシャルだし、あまり不安は無い。

その“敵”がどういう連中で、何故零崎なんかに喧嘩を吹っ掛けてきているのかは不明だが、こうして電話で声を聞く分には、舞織に焦りの色は見えない。

となると状況は、お互い孤立無援。どちらも独力で状況を切り抜けるしかない訳だ。

いつも通りの、絶体絶命だ。

「分かった。も死も殺されるようならまた連絡をくれ。仇は僕が討ってあげるよ」

『うふふふ、ありがとうリトくん。わたしも勿論リトくんが死んだら仇を討ちに行ってあげるからね』

「ああ」

『あ、そうだ。最後に一つだけ』

「……何だ？」

『これが最期の会話になるかもしれないし、リトくん「お姉ちゃん超好き愛してる！」って情感込めて3回言』

ブチっと、

零崎問識は通話を切った。

結局、無駄な時間だった。

「……いや、そうでもない……のか？」

これで少なくとも、電話をかける前より、かけた後の方がずっと、気分は落ち着いている。

何にせよ、家族の声を聞くというのは、思いのほか、気分が良かった。

こんな感情、くだらないとばかり思っていた。

感情など、何の価値も無いと。

だからこそ、有り余って仕方ない感情を、殺意を、世界にばら撒いて生きていた。

世界を憎んで、生きてきた。

なのに

「……僕もすっかり、零崎だな」

当然と言えば、当然。

もう石風の名を捨てて、四年が経つ。

人が変わるには、十分な時間だ。

神が鬼に変わるにも、十分な時間だった。

ならば、今宵の殺戮も、家族のために。

亡き零崎三天王を始め、これまで全ての零崎達が言ったであろう台詞を、そしてこれから生まれる全ての零崎達も言うのであろう台詞を、問識もまた、言うのだった。

「それじゃあ、零崎を始めると死よう」

其の伍

5

舞織との通話を終えて、どれくらい歩いただろうか。

まだ、10分程度だったろうか。

適当に京都の街を徘徊し、ふと目に付いて立ち寄った京都御苑の砂利道を歩いている時だった。

問識は、下手人と思しき人物を発見した。

否、発見された、と言うべきか。

その男は、問識の正面から現れたのだから。

隠れる素振りもせず、堂々と。

目の前に現れた“そいつ”を前に、零崎問識は、停止した。

「ガハハ」

不敵に、豪快に笑いながら、その男は問識をねめつける。

かなりの巨漢だった。全体的に岩のようにゴツく、それなりの筋肉量があるのだろう。

海兵隊か女子高生が着ているような服に、安物っぽいジーンズ。手には日本刀を携えており、鞆はベルトに括りつけてあった。

髪の毛の一切無い頭が焼け焦げたように爛れているのが、見る人が見れば印象的だろうが、問識にとっては、それ以上に絶対に注目しなくてはならない点が、その男の容姿にはあった。

頬にデカデカと刻まれた、刺青。

それは紛れも無く、零崎人識のそれと全く同じ模様であった。

「派手に殺気をばら撒く奴がいるもんだから思わず誘い込んじゃったが、何だ。死色の真紅じゃねーじゃねえか」

大口を叩くその大男は、右手に持った日本刀で肩を叩くようにしながら、尚もガハハと笑っていた。

問識は、殺気をさらに強め、大男に集中させる。

「お前が、今起きてる連続通り魔事件の犯人か？」

「ああ。まあそう言っって言えなくはねえな。しかし、“今起きてる”ねえ。まるで四年前の事件は誰だったか知ってる風な言い方じゃねえか」

まあ知らなきゃこの網には引っ掛からねえんだけどな、と、再びガハハと笑う大男。

言い方をぼかしてはいるが、この男が何か知っている事は明白だった。

「……何故、その刺青をお前が持っているんだ？」

「ガハハ、おいおい、オレとしちゃーこの格好の方を先にツッコんで欲しいんだがな」

「お前の希望なんて知った事じゃない」

そもそも、他人の服装に興味はない、と問識。

それを受けて、またもガハハと笑う大男。

「まあまあ、確認してー事も訳分かんねー事も色々あろうが、まず

は自己紹介から始めねーかい？ お前お前言うにしたって、相手の名前くらい認識してから言うべきだろ。名詞ありきの、代名詞だぜ？」

「……………」

随分と、快活に喋る男だ。

暴力の世界に生きるような連中は、大概が陰湿な性格の持ち主ばかりである。

問識の場合、石風、死吹、闇口と、特にその傾向が強い人間達ばかりを見て育った事で、そういう印象をより強く抱いている。

だからこの男のように、感情を露骨に表す奴を見ると、余計に物珍しく感じてしまう。

やがて大男は、だんまりを決め込んだ問識に頓着せず、先に自分の名前を名乗った。

「俺は黒四館製“夢浮橋三人衆”が一人、夢浮橋伊刈だ」

「……黒四館？」

聞いた事のない名詞だった。

それに“夢浮橋”と言えば、殺し名序列一位“匂宮”の分家という事になる。

匂宮。暴力の世界に君臨する殺し屋ギルド。

「死か死、夢浮橋か。今まで表立って活動死た事はないと聞いてたけどね……」

「殺し屋が表立って活動なんてするものかよ。それよりほれ、お前

の名前も教えとけよ」

分家とは言え、実力は未知数……か。

しかし呪い名ではなく、殺し名を名乗ったという事は、少なくとも戦う気はあるという事だろう。

ならば、こちらもプレイヤーとして名乗らなければならない。

「僕は、新・零崎三天王が一人、零崎問識だ」

問識は、ちょっと対抗して名乗ってみた。

浸透していない渾名を言うくらいに寒さはあったが、幸い相手はそこに触れてくる事は無かった。

「零崎！ 零崎か！？ はあー、まだ生き残ってやがったんだなああの狂気の血統！ こいつぁ面白い！」

何がそんなに面白かったのか、伊刈は腹を抱えて笑いだした。

「しかし、零崎ねえ！ 零崎かあ！！ はっはっは！ 真偽はともかく、そんな過去に滅んだ名前を名乗るとは、あんたも随分と酔狂なこったなあ！」

「……そういう反応はもう慣れている死、自分でもそう思うけどね。ただ、一つだけ否定させてもらおうよ」

零崎は、滅んでなどいない。

言いながら問識は、背中の上ツブザツクから得物を取りだした。

戲言遣いに依頼して、手配してもらった得物。

それは所謂、チェーンソーと呼ばれるものだった。

日本語では自動式鎖鋸と言う。

持ち手はエンジン部分とハンドルに別れ、そこからせり出したガイドバーと呼ばれる金属板に、チェーン状の刃が備わっている。

エンジンが起動する事で、ガイドバーに沿ってチェーン刃が回転し、押し引きするまでもなく対象を切断出来る、言わば刃物のハイエンドである。

本来、林業などの作業において用いられる道具であるが、向ける相手が樹木だろうと人間だろうと変わらない。

高速で駆動するチェーン刃は触れた対象を、ただただ機械的に、切断するだけ。

「……おいおい、お前はジェイソンかよ」

伊刈は、表情を引き攣らせながら言った。

正確には、チェーンソーを人殺しに使う映画の殺人鬼はレザーフェイスであり、ジェイソンはむしろ抵抗する人間によってチェーンソーで殺される側なのだが、この場では一切関係無い話だ。

上記の例の如く、チェーンソーと言えばスプラッタ映画において殺人鬼が使う凶器として有名だが、本来武器として扱うには不向きな道具である。

チェーン状の刃はすぐに刃こぼれを起こすし、それを研ぎ直すにも練達した技術が要る。チェーンとガイドバーの間に生じる摩擦軽減のためには潤滑油が必要だし、エンジンを機能させるには燃料がいる。そうした諸々の条件をクリアして運用しても、エンジン部分が破壊されれば本来の機能はすぐ失われてしまう。

当然認識も運用における欠点に対し幾つか対策を練ってはいるのだが、それでもチェーンソーは客観的に見て、プレイヤーが恒常的

に使うには難易度の高過ぎる得物と言わざるを得ない。

それを承知で問識は、このチェーンソーを得物として使う。
殺人鬼としての様式美、である。

そしてそんな狂気にこそ、伊刈は気圧されたのである。

「言い忘れていたが、僕の通り名は『刀狩令』^{ビーストリット}。このチェーンソーの銘と同じ名だ」

問識は言いながら、『刀狩令』のエンジンを起動させた。

ドルルン、ドルルンと、バイクの排気音にも似た音を発しながら、チェーン刃も高速回転を始める。

「そうかい。じゃあ俺はあんた相手だと相性が悪いって事になんのかねえ」

「どうでもいい。それより、自己紹介は終わったんだ。質問に答えようよ」

質問。

何故、人識と同じ模様の刺青を入れているのか。

「ガハハハ。まあ、その辺の謎は、俺達の正体の“核心”に触れちゃうからよ、ただ教えるって訳にゃあ、いかねえな」

「……なら、いい。力づくで、聞きだすまでだ」

「ガハハ！ いいじゃねえか“零崎”。これでお互い、ガチで殺り合う理由が出来たじゃねえの、よっ！」

伊刈は笑いながら、何の脈絡もなくいきなり、仕掛けてきた。

右肩にかついでいた刀を、そのまま袈裟がけに一閃。

片手で振るっているにも関わらず、太刀筋と筋力の相乗効果で恐るべき速度と切れ味を持つ斬撃となっていた。

問識は『刀狩令』では受けず、バックステップで間合いから逃れる。

鏑迫り合いに持ち込めば確実に競り勝てる『刀狩令』ではあるが、今の斬撃は早過ぎた。

見た目に違わぬ剛剣。受ける箇所を間違えれば、破壊されるのはこちらの武器の方だ。

「まだまだア！」

伊刈は離れた問識との距離をすぐに詰め、第二第三の斬撃を繰り出す。

それを二歩、三歩と身体を引き、紙一重でかわす。

そして四撃目が来る所で、問識も仕掛けた。

「ふっ！」

『刀狩令』による、平突き。

触れればただそれだけで微塵切りにされるチェーンソーの刃を、伊刈が三撃目を振り切り、刀が右に流れた隙を突き、胴体の中心を狙う。

タイミング的にも速度的にも、刀では対応できない。そう判断しての一撃だった。

「甘えよ！」

「……っ!？」

しかしその突きは、阻まれた。

否、自分で止めざるを得なかった。

直後、伊刈が攻撃を流した逆方向、左から現れた攻撃に対応するため、問識は『刀狩令』を引き戻し、防御に使った。

攻撃は『刀狩令』の胴体、エンジン部分に直撃し、問識自身もその衝撃で身体を数メートルほど押し戻される。

衝撃はエンジンからハンドル部分に伝達し、ビリビリとした感触が問識の両手に伝わる。

「……鞘、か」

「ああ。刀よりもリーチがあり、先端に鉛も仕込んである、武器としての使用を前提にした鞘だ」

右手に刀、左手に鞘を持ち、得意げに構えながら言う伊刈。

刀身の長さを測られる危険を冒してまで最初から抜き身の刀を持って現れたのは、鞘による不意打ちを狙ったのだ。

敵の意識を刀に集中させ、不意を突く。

牽制。陽動。ミステイクシヨン。戦闘における基本的な技術であり、『勾宮』のお家芸でもある。

問識は、ふう、と溜め息をついた。

「おいおい、何をほっとしちゃってんだ？ 今の一撃を防げて安心してんなら筋違いもいいとこだ。右手に刀、左手に鞘の二刀流こそが、俺の真骨頂なんだぜ？」

「……………」

当然、問識は決してほっとなどしていないし、安心もしていない。むしろ、当惑していると言っている。

この男、呆れるくらいの、バトルマニアだ。

プレイヤー同士の殺し合いを、純粹に楽しんでいる。

自分の得物やら戦法やら、本来秘匿して当然の事柄まで、その場のテンションでペラペラと喋ってしまう。

こんなにも余裕のあるプレイヤーは、初めて見る。

(……いや、初めてでは、ないのか)

問識は苦々しい表情で、思い出したくも無いあの人類最強を思い出し、嫌な気分になった。

(だが、それは本来、あり得ないんじゃないか?)

哀川潤。

死色の真紅。

人類最強という脅威のパーソナリティに“似ている”人間など、本来絶無の可能性のほずなのだ。

好戦的で、敵が強ければ強い程、あるいは自分が追い込まれていればいる程、燃えてくる主人公気質。

それが成立する人間など、それこそ人類最強と呼べるレベルの強度が無ければならない。

にも関わらず、この男は、

二刀を自在に振りまわす。この程度のスキルしか持たないまま、

そんなパーソナリティを有している。

伊刈が“三人衆”と言った事から、後続で襲ってくる奴がいる可能性も考慮して、今の内に敵のレベルを把握するため、あえて伊刈に攻撃をさせてみたのだが……。

（確かに、練達死てはいる）

（勾宮の分家の中でもかなり強い部類だろう）

（だが、それでも本家に並ぶ程ではない）

（ま死てや死色の真紅に打倒できるとは、とても思えない）

ならば、何故――

（……黒四館製、っていうのが、鍵かもね）

「おい」

「ああ、何だよ？」

「その刺青の事、話す気は？」

「だから、言ってるんだろ？ それはお前が勝った時に――」

「……認識が甘いようだから言っておくけれどね。僕が勝つ時は、つまりキミが死ぬ時なんだよ」

ドルルン、と、威嚇するように『刀狩令』を唸らせる問識。

先刻鞘による打撃を受けたが、機能面での損傷は見られなかった。元々強度の面で便宜は図ってもらっていたから、当然と言えば当然なのだが。

反面、この程度の破壊も出来ない伊刈の攻撃が、貧弱だったという証左でもある。

「……ふん。その口ぶり、もう俺に勝った気でいやがんのか？」

強がりなのか、あるいは単に鈍いだけなのか、伊刈の口調にはまだ余裕が見えた。

まあ確かに戦況だけ（といってもほんの交錯程度だが）見れば、伊刈の方が押していた訳だが。

（この“鈍さ”も、最強のパーソナリティを模倣するためのものなのか……？）

だとしたら、余計に不可解なのが、
頬に刻んだ、人識印の刺青だ。

ここまで人類最強を想起させるベースが整っているのに、何故、
零崎人識の模倣などするのか。

あるいは、させているのか。

この男を製作したと思われる、黒四館という奴は。

「んま、そんなに自信あるんだったら殺してみりゃあいじゃねえか。なあに、俺も男だ。ちゃんとお前が俺に勝てたら、末期の言葉でもって質問に答えてやらあ」

「……………」

二天一流よろしく刀と鞘を水平に構え、そんな事を堂々と言う伊刈を見て、問識は『刀狩令』を右手で構える。

殺気を伊刈に集束させて放ち、しばらくの硬直。

そして、問識は動いた。

その瞬間、伊刈の目の前から、問識が消えていた。

「なっ、ええっ!!?」

姿だけではない。

あれ程膨大な量を垂れ流していた殺気も、チェーンソーが駆動する騒音さえも!

零崎問識という殺人鬼の存在を思わせる“あらゆる要素が”、伊刈の前から消え失せたのである。

伊刈は当然、混乱する。

「ここだよ」

「っ!?!」

しかし直後、背後から掛けられた声に反射的に反応“してしまった”伊刈は、とっさに左手の鞆を後方に振るった。

そしてその攻撃は、左腕ごと“刃の回っていない”チェーンソーによって、根元からスパンと斬られていた。

「ぐっ、ぐああああっ!!!?!」

左腕を斬られて呻く伊刈を見下ろすようにしているのは、消えたはずの問識である。

しかし、そんな認識は当然、伊刈の錯覚なわけで。

殺気を一瞬で消し、その前からチェーンソーの駆動音を徐々に弱め、そうして相手の認識に隙を作り、その隙を突いて背後に回り込んでいたというだけの話である。

殺意を向ける事で己の存在感とし、それに意識を向けている間にチェーンソーの消音を進める。そして殺意を消したその瞬間、敵は認識を認識できなくなる。

膨大な殺意を利用した、ミスディレクション。

この四年間で問識が会得した、零崎としての戦法である。

そして、戯言遣いに依頼し、赤神財閥経由で特注させたチェーンソー『ビーストリット刀狩令』。

特殊合金を用いたチェーン刃と、停止時の完全なロック機能により、エンジンが稼働していない状態であっても、日本刀ばりの切れ味を実現できるのである。

「やれやれ、これだから“零崎”になってからの斬った張ったは死んどいんだよね」

言いながら問識は、伊刈の右手に残っていた刀も、『刀狩令』で弾き飛ばす。

これで夢浮橋伊刈は、ほぼ無力化された。

「僕は零崎と死ては全然未熟だ死、身体も弱いから、いちいちこんな小細工を死なきゃならない。石凧だった頃は相手の方からやられてくれていたから、楽なもんだったけどね」

まあしかし、それは言わない約束である。

石凧砥石から零崎問識となったあの日、大厄島に死神の鎌を置いてきた時から、問識は二度と“石凧”としてのスキルを使わないと

誓っている。

「……さて、勝負は付いた。その刺青の秘密を——」

問い詰めようとして、問識は言葉に詰まった。

その理由は、問識自身には分らない。

だが、あえて仮説を立てるならば——

左腕の断面を右手で鷲掴みにし、うずくまる夢浮橋伊刈の、背中越しに聞こえてきた含み笑いが、理由の一端かもしれない。

問識の技によって戦闘力を奪われ、追い詰められながら、笑っている伊刈の姿に、死神時代には決して味わう事のなかった“戦慄”を、覚えたのかもしれない。

「斬られたか……。これじゃ、“死色”相手に、喧嘩を振る事も出来やしねえな……。ククツ、ざまあねえ。弟達に顔向けできねえなこりゃ」

それは、伊刈の独白だった。

四年前までの問識なら、こんなうわ言は無視してとつくにとどめを刺している状況だろう。

しかし問識は、それに聞き入ってしまった。

とどめを刺す事も、尋問する事も忘れ、伊刈の死に際の言葉に聞き入ってしまった。

何故なら、それはどうやら、彼の“兄弟”とやらに向けた独白——家族への言葉だったから。

未だ“家族”という概念を学んでいる途上である問識にとっては、聞き流せない独白だったのだ。

「……まあ、いい。俺の代わりなんぞ幾らでもいるんだ。せめて俺は、対象が違うとは言え、既に発動しちまった俺の“機能”を、全うするとするか」

そうつぶやいた伊刈の右手には、
いつの間にか、小さな脇差が握られていた。
そして伊刈はそれを振り上げると背後の問識を振り返り――

（斬られる――！？）

問識の身体が、真紅に染まった。
最初からペンキで汚れていた問識だが、唯一元の色を保っていた、
戯言遣いから借りていたシャツも、鮮血に染まった。

夢浮橋伊刈の、血によって。

「……！！」

夢浮橋伊刈は隠し持った脇差で、自らの頸動脈を切り裂いたのだ。
結果、腕からの出血など比較にならない勢いで血が吹き出し、それが問識に降りかかったのだ。

そして、伊刈は地面に倒れ伏した。

深く斬り過ぎて刃が気管まで届いてしまったのか、苦しげにのた打ち回る伊刈だったが、やがて動かなくなった。

「……………」

結局、この男は何も言う気が無かったらしい。

それは他の“三人衆”とやらのためか、“黒四館”とやらのためか、あるいは、“兄妹”とやらのためか。

あんな守る気もない約束をしたのは、問識に本気で襲いかからせるための方便だったのだろうか、それが本人の意思だったのか、あるいはお家のためだったのか。

散り際に残した、“機能”とは何の事だったのか。

そして最期の、自らの首を切り裂いたあの奇行には、何か意味があったのか。

色々と不可解な点が残り、後味の悪い勝利だった。

（全く）

（その心意気だけは、最強だ）

（心意気だけで、十分厄介だったよ）

戦闘の結果だけを見れば、問識の圧勝であった。

しかし、それ以外の部分で、伊刈は問識の理解を越えていた。

だからだろうか。問識は得体の知れない敗北感というか、虚脱感を味わっていた。

「……まあ、いいか」

いつまでも死んだ奴の事を気にしていても仕方無い。

問題は、“本当にこれで解決したのか”という事。

色々と狂言の多かったこの男だが、もし“三人衆”という名乗りが正しく、またこの付近に残りの二人がいると言うのなら、また自分に襲いかかってくるかもしれない。

「復讐のため、じゃあないんだろうけれどね」

ともかく、またいつ襲われるかも分からない。

問識はチェーンソー『刀狩令』に付いた血を払いながら、その場を後にした。

其の伍（後書き）

トリビアコーナー（つまり蛇足です）

問識君の武器『刀狩令』のルビ“ピーストリート”ですが、これは英語の“Peace treaty”（日本語で“平和条約”の意）から取りました。

零崎つばいネーミングにしようという感じで、別に深い意味はありません。考えたのも問識君といおりん（＋赤神家？）という設定なのです。

其の陸

6、

戦闘後、京都御苑を出ようとした問識だったが、チェーンソーなど手に持って歩いていれば、すぐに殺人犯と誤解されて（殺人鬼ではあるが犯罪者と呼ばれる謂れは無い）警察やら機動隊やらに攻撃されてしまう。

銃は何丁向けられようと別に怖くないが、民間人にしゃしゃり出られて、勢い余って殺してしまった暁には、あの死色の真紅が自分をガチで殺しにかかってくるはずだ。

それは、好ましくない。

迎え撃つならば、万全を期したい。

そう考える問識だった。

故に、大通りに出る事は自重し、小道の方へ入るようにした。

とは言え『刀狩令』の使用に支障を来さない程度の道幅がある、小道と言うよりは裏通りを選んで歩く。

そうすれば、その内“三人衆”の二人目とかが現れ、襲ってくるだろう。

そう考えていた矢先――

「傑作だぜ」

「――！！」

正面。

聞き覚えのある声と聞き覚えのある台詞で、見覚えのある姿が視界に現れた。

まだらに染めた髪、三連ピアス、タクティカルベストに登山靴。頬にはついさっきも見た独特な模様の刺青。

しかし、今回はそれが、問識が普段見る人物の頬に位置していた。

「……レン？」

思わず呟くと、それを聞いた途端苦虫を噛み潰したような表情になる人識と思しき人物。

「だから、俺を兄貴と同じ名詞で呼ぶんじゃないやねえよ！ 次それ言ったら今度こそ殺して解して並べて揃えて晒してやつからな！」

「……人識兄、その台詞、前会った時も言ってたよね」

問識は言いながら、クスリと笑ってしまった。

この場所で、このタイミングで居合わせたのは、果たして偶然なのか。それとも必然だったのか。

あるいは人識も事件の噂を聞きつけて、この京都まで来ているという可能性もあるにはあっただろう。

でも、あれ程舞織が躍起になって探しても見つからず、放任していた問識の方がこうもあっさりその姿を確認するというのは、何だか滑稽なように思えた。

何より、人識の姿を見ただけで、ここまで安心してしまう自身の心境の変化にこそ、問識は一番驚いていた。

……それが、己の弱体化である事は分かっていたが、それでも、

だ。

（この感情を、良死と死ている僕がいる……）

「つたく、何だか京都で俺の真似っこしてる奴がいるって聞いて来てみりゃ……。何で問識くんがここにいるんだ？　まさかお前が犯人じゃねえだろうな？」

「……まさか。人識兄を反面教師に死んでいる僕に限ってこんな事する訳がないだろう？　僕がここに居るのは、人識兄と同じ理由だよ」

「はん、成程な。新しい“零崎”探してるお前の行動原理を考えりゃ、バッティングする可能性は確かにあったか。全く、傑作だぜ」

やたらと傑作傑作言うなあ、と、ぼんやり思う問識。

「カハハ、まあ、いいか。鉢合わせちまったもんはしょーがねえ。俺もこの事件起こしてる奴のツラ見るまでどーにも落ちつかねエし、こっからは共同戦線と行くか。とりあえずまずは、情報でも共有しとくか。お前が知ってる事、教えとけよ」

「……いいけどね。でも、それは――」

近づいてくる人識に向けて、問識は、

「お前なら、全部知ってるんじゃないのか？　“時宮”」

右手にぶら下げていた『刀狩令』で斬りつけた。

停止していながらにして、日本刀と変わらぬ切れ味を再現しているチェーンソーで、下から跳ね上げるように人識の首を狙う。

「うおっとおっ!？」

それを間一髪でかわし、大きく下がって間合いを取った。

かなり慌てた様子で、人識、否、“人識の姿をした何者か”は喚いた。

「あつぶねえなこの野郎!？　もう少しで死ぬところだ!!」

「ああ。殺す気でやったからな。と言うか、お前も僕を、殺す気だったんだろう？」

無表情で言う問識。

対する人識の方は、落ちつきを取り戻したようで、怪訝そうな目で問識を見る。

「つか、何？　お前、俺を何て呼んだ？　俺が時宮だって？」

「ああ。お前は、操想術によって“僕の記憶”から作り出された幻覚の零崎人識だ」

言っている問識の額には、うっすらと冷や汗が浮かんでいる。

それ程に、今の一瞬、内心では肝を冷やしていたという事だろう。

その様子を見た人識の姿をした者は、カハハと、人識っぽく笑う。

「ちえっ、完璧に刷り込んであったはずなんだけどな。どうして分かった？」

「……一つは、さっき対戦したプレイヤーの、刺青だよ」

夢浮橋伊刈。

セーラー服と日本刀に、禿頭のマッチョなおっさんという最悪な組み合わせの上に、人識の刺青まで持っていた男。

「あれは、お前が僕に操想術をかけるための布石だったんだろ？
だから、このタイミングで人識兄が現れた時、偶然に死ては出来過ぎていると考える事が出来た」

「成程。確かにご都合主義になりがちだって考えは間違ってるねえな。
けど、そりゃ後付けの理由だろ？ 俺だってそのくらい承知の上で、
こうして出てきたんだ。その程度の違和感だけじゃ、俺の暗示は解けないはずなだけだな」

「……ああ。実際、僕も騙されかけたよ。お前の創る人識兄の幻覚は、完璧だった。声色、口癖、家賊しか知らない呼び名についてのこだわりも、全部“人識兄が実際に言いそうな事”だった。実際は僕が、そう言っているように聞こえたってだけなんだろうけどね」

「おうよ。合言葉もヒミツの質問も、全く意味を為さない。俺がテキトリーな事を言っても、聞いているお前が“認識している人物が言いそうな言葉”に勝手に脳内変換してくれるからよ」

操想術。

相手の精神に干渉し、幻覚を見せる技術。

呪い名序列一位、恐怖を司る『時宮』が使う代表とも言える技術だ。

そして、呪い名は殺し名とは違い、戦うという事をしない。
戦わずして敵を制圧し、標的の前で名乗りを挙げる頃には、既に
状況は完結しているのである。

この場合、人識の姿をした操想術師は、問識がさっきまで戦っていた伊刈を利用し、問識に既に暗示をかけていた。

そして問識は、相手が操想術師と分かっている今も、眼前の人物が人識だという認識をしまっている。

それ程に、強力な暗示を、この操想術師はかけていた。

ならば、こんなに早く、つまりは殺される前に問識が「人識が幻覚である」と（しかも自力で）看破する事は不可能なはずなのだ。

「見破れた理由の二つ目は、僕自身も“呪い名”の世界に身を置いていた事があるという事だ。呪い名の手法やスキルにある程度の予備知識があったからこそ、常に操想術に対する警戒が、僕の意識にあった」

「はん。そーいやお前、石風と死吹のハーフだったな。成程、その辺の事情で、俺らのやり方については分かってたって訳だ」

当然、この操想術師が問識の出自を知っている訳が無い。

だからこれは、幻聴だ。

おそらくこの操想術師は適当に出自を予想して言ったのだろうが、問識はその適当な言葉を「人識が知っている情報」として聞きとってしまう。

下手な言動が幻覚を見抜く材料にならず、むしろ積極的に「相手が本物だ」と印象づけさせる。

強力な暗示、である。

問識もこれまで何人か同じ技術の使い手と遭遇した事もあるが、

これ程厄介な使い手と出会ったのは初めてだと思った。

「だが惜しいかな、まだ足りねえな。お前がいくら警戒していても、それだけの材料で、近づく俺をガチで殺しに行くなんてできねえはずだぜ？」

「ああ、だから、三つめの理由はある」

そ死てこれが、最も大きな理由だ、と。

問識は言った。

「その、服装だよ」

タクティカルベストに、登山靴。

“ 見覚えのある ” 服装である。

しかし――

「人識兄は、ほんの短いスパンで自分の着るものをコロコロ変えているのさ。それこそ会う度に全く違う、“ 見た事もないような ” 服装を死ているんだ」

オシヤレガンバリストだからね、と。

問識は付け加える。

「だから、それが本物の零崎人識なら、“ 僕の見覚えのある姿 ” を死ているはずがないんだよ」

操想術の幻覚を作り出す材料は、あくまで術をかけられる人間の

“記憶”や“認識”に依存している。

だから、本人が見た事もないような姿をしている人間を、幻覚で生み出せるはずがないのである。

「やれやれ、僕が興味のないファッションのおかげで幻覚だと確信できるなんて。何と言うか、皮肉なものだね」

「……傑作だぜ」

人識の姿をした操想術師の方も、問識と似たようなリアクションだった。

「やれやれって言いてえのはこっちの方だ。まったく、こっちだってファッションは想定外だったつーの。困った性癖のある兄貴だぜ。お前から何とか言ってやったらどうなんだよ」

「言って聞くような兄なら、僕だって苦労死や死ないよ。それに、これが操想術を破る鍵になるんだと分かった今、別の意味で止めさせる道理がないよ」

問識の言葉に、カハハと笑う操想術師。

自分で見破れた理由を口にする事で、あるいは幻覚が解けるかとも思ったが、未だ、抜けだせる気配がない。

「ま、そりゃそーだわな。んじゃあ、正体もバレちゃった事だし、改めて、名乗らせてもらうぜ」

人識の姿をした操想術師は、そうして自らの名を名乗る。

「俺は黒四館製『夢浮橋三人衆』が一人、夢浮橋時宗だ」

「……夢浮橋、だって？」

問識はその名乗りに、首をかしげる。

夢浮橋を名乗ったという事は、つまり先刻の伊刈と同じ『殺し名』という事になる。

それも、呪い名序列一位『時宮』とは対極に位置する殺し名、『句宮』の分家である。

句宮、時宮の両者は、互いに互いの存在を忌み嫌っており、その対立ぶりは徹底している、はずである。

以前、夢浮橋と同じく分家の一つである『早蕨』が、とある理由から『時宮』の一人と共闘した時も、互いに互いを利用し、毛嫌いし、裏切り合う関係でしかなかった。

それなのに、眼前のプレイヤーは堂々と『殺し名』を名乗っているにも関わらず、『呪い名』の、それも『時宮』の技術を恥ずかしげも無く使っている。

これは、明らかに“異常”だった。

「ああ。俺は確かに操想術の使い手だ。けど、完全な操想術師じゃねえ。ちゃんと、殺し名としての戦闘技術も持ち合わせている」

「……なら、何故お前は操想術を使う？ いや、む死ろ……」

何故、操想術を“使える”のか？
問識は問わざるを得なかった。

操想術と言っても、所詮は催眠術の一種である。
それを操るための鍛錬とノウハウさえあれば、身に付ける事自体は可能である。

しかし本来、それを『殺し名』が使う事自体、真っ当なプレイヤ―ならば嫌悪感を抱くはずなのである。

自分で敵を殺せる技術を持っているにも関わらず、それを利用せずに『呪い名』の技術を使う事は、自らの戦闘スキルの否定であり、『殺し名』としてのプライドを放棄するに等しい行為だ。

それなのに、この“夢浮橋”時宗は、後ろめたい事など何もないと言った風に、殺し名を名乗りながら、呪い名の技術を使う。

「……さっきの伊刈以上に、異常だ。一体、何なんだお前達は？
『夢浮橋』とは、『黒四館』とは一体何なんだ？」

常に冷静沈着、感情の起伏が少なく、舞織から「無愛想な鉄面皮」と称される彼（ちなみに鉄面皮という語彙は舞織の勘違いで、単に無表情というニュアンスである）だが、この時ばかりは、声を大にして時宗に食ってかかった。

哀川潤に似せたパーソナリティ。

殺し名でありながら呪い名の技を使う。

どちらも、現実にはあり得ないはずの設定である。

それが、勾宮のいち分家であるはずの『夢浮橋』において実現されている。

そして、それを体現する彼らが口にする“黒四館”なる名前。

「まあ、そう思うよな？　そう思うのが普通だよな」

時宗は、カハハと笑った後で、言った。

「それはよお、俺達が、黒四館つつー博士によって“再改造”された、世界を終わらせるための集団だからよ」

問識は、その言葉に目を瞠った。

世界を終わらせる集団。

人類最悪、西東天！

「具体的には、人類最強“死色の真紅”哀川潤と、人類最終“橙なる種”想影真心をぶっ殺す為に改造、作成された軍団ってトコだな」

で、俺達三人衆は、死色の真紅担当って訳だ、という説明を、問識は聞く。

「つつても三人目が出てくる可能性は完全にゼロだと想定しちゃいるがな。俺のこの操想術は、その赤色対策の最たるものなんだからよ」

殺し名が使う操想術。

確かにその馬鹿げた組み合わせは、かの最強をも欺けるかも知れないが、

そういう意味合いだけでも無いようだった。

「俺の操想術は、相手に恐怖ではなく、親近感を与える。伊刈はそういう暗示だったんだよ」

あの、快活に喋る殺し屋。

しかし、ならばあの刺青は……？

という、問識の疑問を察したのか、時宗はカハハと笑いながら言う。

「ああ。あの刺青は、問識くん、お前が勝手に“伊刈の頬の火傷跡”を、俺の刺青の形に見立ててしまったっつーだけの話なんだよ」

ロールシャッハテスト、というものがある。

一見意味不明な図形を見せ、それを被験者がどういう形に見えるかによって、被験者の精神状態を測るというものである。

その理論を応用し、伊刈の頬の火傷跡が“見た者にとって見覚えのあるもの”に錯覚させる、というギミックを時宗が仕掛けておいた、との事だった。

「この仕掛けは、別にあいつの頬だけにあった訳じゃない。あのハゲ頭の火傷も、あとは手や足、服装にもちょこちょこ、そういうギミックが仕掛けてあったんだよ」

そして、伊刈の全身に仕掛けられた“既視感（あるいは親近感）を呼び起こすトラップ”は、見た者にとって近しい人間が持つ“最も特徴的な部位”として、相手に認識される。

実際に伊刈の頬にあったのは人識の刺青ではなく、“人識の刺青”という特徴に錯覚させる効果を持った火傷跡だった、という訳だ。仮に問識が舞織の方を近しい人間だと認識していた場合は、伊刈

の頭の火傷跡が“舞織がいつも被っているニットキャップ”として認識されていたのだろう。

「で、その刷り込みが成功すりゃ、もう勝ったも同然。哀川潤に近い奴になりすませば、例え人類最強であろうと活殺自在って訳だ」

人類最強、哀川潤。

そんな彼女の唯一にして最大の、愛すべき弱点として、“身内への甘さ”がある。

敵として相対した彼女は確かに問答無用の強さを誇るが、彼女が身内と認めた人物への対応は（迷惑さ加減は変わらないにしろ）気心の知れた友達感覚である。

当然、警戒も薄くなる。

仮に哀川潤に対し、この操想術が有効に作用していれば、確かにあの最強を、殺し得るかもしれなかった。

「……だが現実問題、網にかかったのは僕じゃないか」

「そうなんだよなあ！」

あーもう、と、異様に悔しがってみせる時宗。

と言うか、こんな風にべらべら喋っている内容だったのだろうか？
こういった不可解な行動や支離滅裂な言動は、人識らしいと言え
ばらしいが。

ともかく、伊刈の言っていた“機能”の意味は理解できた。

しかし今度は、それをあの局面でつぶやいた理由が分からない。

何よりこれだけでは、自分で自分の首を切るというあの愚行の説明
明がつかない。

（“最強”を殺すための機能、か）

あるいは、二人目に繋げるための機能とは別に、他の機能も付加されていたのかもしれない。

しかし問識は、そこまで思考を繋げない。

元よりものを考えるのは苦手な上に、今はひどく頭がぼんやりしている。

これも時宗の操想術の影響かもしれない。

「だからまあ、かかっちゃったもんは仕方ねえとして、とりあえずお前、殺すから」

「……………」

ひとしきり悔しがってから、時宗はそう言った。

まあ、そう来るだろう。

黒四館なる人物によって再改造された『夢浮橋』。人類最強ならびに人類最終を殺そうという目論見。

それをこうして話したのは、口封じを前提にしているから、だろう。

夢浮橋時宗。

殺し名や呪い名の境界にこだわりは無いにしても、己の技に対する自信については、普通のプレイヤー同様に持っているようだった。

「お前にかかった操想術はもうどう足掻いても解けねえだろ？」

「……ああ。どんなに相手が別人だと思いつても死んでも、身体が

勝手に人識兄の攻撃を警戒死に死んでいる」

そう。

今問識は、『刀狩令』^{ビーストリート}をスロットル全開に稼働させている。自動駆動する刃物。チェーンソー。

これは、人識の糸を用いたスキル“曲弦糸”への対抗策という意味合いもあるのだ。

細く張り巡らされた糸を操ろうにも、チェーンソーのエンジン音が糸を振動させてコントロールを乱し、自動稼働するチェーン刃ならば、張られた糸を切断できる。

それは当然、糸が張られる前にエンジンを稼働出来れば、の話であるが、その辺りはまた、別のスキルで補う作戦もある。

ともかく、今の問識は、人識と戦う意識でもって身構えてしまっている。

しかし、実際の相手は、夢浮橋なのである。

操想術の使い手でありながら、戦闘のスキルも併せ持つ。

しかしそのスキルまでは、人識の模倣ではないはず。

夢浮橋としての、殺し屋としての技術を使うはずなのだ。

つまり、人識が使う戦法に対して身構えている問識は、時宗の戦法に必ず意表を突かれてしまう事になる。

“殺し名”のスキルとしても操想術を操る。

そういった己の優位性を自認しているからこそ、時宗のこの余裕だろう。

「カハハ。まあ、お前が零崎だっつーんなら、家賊である俺を殺す事自体が出来ねえかもしれねーけどな」

「……ああ。正直、戦いたくもないな」

特に、人識は、
問識にとってそういう奴なのである。

苦手意識、というか、
トラウマ、というか、

そういう要素を持った、兄なのだ。

「……まあつまり、戦いたくない相手なら、戦わなければいい」

「あん？ 何ぶつぶつ言ってるんだ？」

問識がぼそつと言った言葉は、時宗の耳には届かなかった。
もつとも、仮に届いていたとしても、意にも解さなかっただろう
が。

「じゃ、そろそろ行くぜ！ 殺して解^{バラ}して並べて揃えて晒してやん
よ！」

そして人識、否、夢浮橋時宗は、問識へ向けて突貫——
しようとして、

それは、果たされなかった。

「……あ？」

何故なら、

時宗は突貫するどころか、

その場から一歩踏み出す事すら出来ず、そのために足を地面から浮かす事すら、微動だにできなかったから。

「な、何だ、こりゃ……!?!」

「……ふう。流石に今は聞き逃死ようがなかったよ、夢浮は死時宗。人死鬼兄なら、今のこの状況を、理解できないはずは無い」

瞠目する時宗に対し、問識は若干の呆れ顔だった。

“時宗と同じく”微動だにしない問識は、言葉の節々に“死”を増やしながら言う。

「と言うか、呪い名の技術をかじったキミなら、僕の死やべり方から何か、連想されるべきものがあるんじゃないかい？」

「……っ!?!」

夢浮橋時宗は、思い至り、愕然とした。

零崎問識。

石凧と死吹のハーフという稀有な出自を持つ殺人鬼。

実際には、時宗は問識のそんな特殊な素性は知る由もなかったのだが、それでも、問識のヒントで思い至る。

“し”を“死”と発音するこの喋り方は、紛れも無く、『呪い名』序列五位、呪い名の中で最も希少とされる『死吹製作所』の人間独特の方言！

「つて事は、これは『死吹』のスキル“身体支配”！？」

「ああ。死吹の人間はこのスキルを“藁人形”と呼んでいるけどね」
そう。

問識が時宗の名乗りを聞き、驚いたのは、『勾宮』の分家が『時宮』のスキルを使っていたから、というだけでは無かった。
純粹に、意外だったのだ。

『殺し名』でありながら、『呪い名』のスキルを使用する。
そんなプレイヤーが、“自分以外にも”いたという事が。

「バ、バカなっ！？ お、俺のような奴でもなきゃ、そんな矛盾を、受け入れられるはずがねえ！！」

「その姿で言われると、ものすごく説得力がある台詞だけどね。でも、僕の場合は事情が事情だけに、矛盾死てるとは思ってない。それだけだよ」

石凧と、死吹のハーフ。

そして、闇口として働いていた日々。

その全てが、石凧砥石、ひいては零崎問識を構成する要素である。
“名”を捨て、鎌を捨てた問識は、石凧としてのスキルは使わないと誓っているが、それ以外に身に付けたスキルは、全て己の思うように使おうと決めている。

ちなみに伊刈を相手取った時にも、零崎としての“殺気のコントロール”以外に、『闇口』の歩法も使っていたのである。

それは、零崎問識という、暴力の世界に産み落とされた「歪んだ存在」たる自分を肯定するための、意地であり、覚悟だった。

「まあ、僕の人体死配は見様見真似で身に付けたようなものだから、死滅さんのように“ダメージまでリンクする”ような高度な藁人形じゃないけど」

死吹としてのスキル“藁人形”

対象と自身の身体の動きを、合わせ鏡の如く真似させるスキルである。

生粋の『呪い名』であり『死吹』であつた、かつて「裏切同盟」（詳細略）に所属していた死吹屍滅は、己の動きだけでは無く、外傷までも鏡映しにリンクさせ、自らの肉体を傷つける事によって敵に死傷を負わせるという、とんでもない非戦闘スタイルを持っていた。

対して、問識。

相手に真似させるのは、単純な身体の動きのみ。
しかしこの場合、それだけで十分だった。

「けど、僕の場合、『刀狩令』があるからね」

相手を近づけさせて、このチェンソーの刃を相手に当てれば、それだけで相手は八つ裂きである。

この場合、ダメージまでリンクしていれば問識の身体までバラバラになってしまうので、むしろリンクしては困るのである。

「あ、ああ……！！！」

敗北を確信してか、夢浮橋時宗は声にならない嗚咽を漏らし始めた。

明らかに、零崎人識が漏らしそうもない声である。
最早、操想術も切れかけである。

「お死えておいてやる。夢浮は死時宗」

そう、問識は歩きながら言った。

当然、対面の時宗も歩き出す。

不本意でも不条理でも、歩かなければならない。

問識に、近づいていかなければならない。

死吹のスキル“藁人形”とは、そういうスキルなのだ。

「キミの操想術は、本当に完璧だったけど、後半の方は、結構穴だらけだったよ」

ずんずんと歩きながら、言う問識。

「多分最初の綻びは、キミが自分の能力を解説死始めた所からかな。そこからキミの台詞に、キミの地が聞こえるようになってきた。そもそも人死鬼兄は、あまり自分のスキルを自慢死たりする性格じゃなかった死」

時宗の方も、ずんずんと歩いていく。

「あの無意味に悔死がる所は良かったけど、その後が最悪と言ってもいい失言だったよ。あのレンが、人死鬼兄が、『家賊だから殺せない』なんて、言うはずが無い」

かつての零崎の長兄、人識が唯一“家族”と認めていた零崎双識

を、『自殺志願』欲しさに何度も殺そうとしていた人識である。
彼にとって『家族』とは、慣れ合いの対象ではないのだ。

「それに、……これは多分、本人も気づいてないと思うけど、人死鬼兄は、本気で『殺す』なんて言葉を使った事なんか、無いんだよ」
少なくとも、僕が死ぬ限りはね、と、問識は言った。

始めて問識と人識がバトルした時も、
殺して解して並べて揃えて曝してやるとか言ったくせに、
結局、負けた問識を、殺さず解さず並べず揃えず曝していない。

殺人鬼の、くせに、
空虚過ぎる「殺し」の表明。

そしてその空虚さは、次第に人識から「人を殺す力」を、本当に奪っていった……

「だからまあ、何というか」

問識と時宗は、もう至近距離と呼べる程に、接近していた。

問識は歩みを止め、『刀狩令』を上段に振りかぶった。

時宗もその動きだけをまね、何も持っていない両腕を振りかぶる。

「人死鬼兄の真似なんて、誰にも出来ない。それが、キミの敗因だよ」

「……傑作だぜ」

人識と同じ声で言ったその言葉を聞き、問識はふと、最近聞いた言葉で返した。

「戯言だろ」

そして問識は、『刀狩令』を振り下ろした。

其の染（前書き）

染の九の部分が一七になつてゐる漢字が見つからなかつたのでこちらで勘弁してください（

そして再び唐突に視点変更し、今回は戯言遣い視点です。

其の染

7、

哀川さんから今回の模倣犯の話を聞き、問識くんが外に飛び出して行って、30分程。

ぼくと哀川さんは、京都市内の某高級ホテルの最上階にある展望レストランに足を踏み入れていた。

店の奥へ入ると、そこには窓際の席で、洋風料理を出す店には不釣り合いな日本酒を傾ける男がいた。

死に装束のような白い和服。背筋の伸びた瘦躯。

トレードマークの狐面は、今は外してテーブルに置いていた。

素顔は少し、哀川さんに似ている。

前に会った時から、否、

四年前、初めて会った時から、全く変わらない姿。

「……また会いましたね、西東さん」

「『また会いましたね』。ふん。確かに、久しぶりとは言えないな。ならばこう言うしかねえか。……また会ったな、俺の敵」

狐面の男。

人類最悪、西東天。

実はぼくはつい最近、まみえたばかりである。

二か月前に、これまた哀川さんからの情報で、西東さんに不穏な動きがある事を察知したぼくは、四年前の騒動と比肩し得る程の修羅場を経験していた。

請負人としての業務の合間を縫っての情報収集に、心理戦、果ては『殺し名』まで絡んでの斬った張ったまで繰り広げ、ようやくその目論見を頓挫させたのは、今からほんの三日前の話だった。

このホテルも、その時に西東さんが根城にしていた場所だったから、所在の手掛かりくらいは見つかるかもしれないと思い入ってみただけなのだ。

しかし、まさか未だにここにいたとは思ひもなかった。

「……ふん、お前の方は、実際久しぶりだな。俺の娘」

西東さんは哀川さんの方を見ながら言った。

どうやらこちらは真正正銘、四年ぶりの再会のようなだ。

「ちっ」

哀川さん、会うなり舌打ちである。

不機嫌度はここにきて一気にマックスまで上昇しているようだ。

「あーそーだな確かに久々に見たなそのムカつくツラ。もう金輪際見る事もねーと思ってせーせーしてたっつーのによー」

「……………」

そんなに嫌だったのなら何故仕事の方を問識くんに押し付けてま
でぼくに同行したのかと。

相変わらず、父親の前ではツンデレな哀川さんだった。

「いーたん」

そんな事を思っていると、不意に当人から声をかけられた。

「何でしょう？」

ぼくは平然と素知らぬ振りでいかにも「何故呼びかけられたのか
素で分からない」といった風なりアクションで哀川さんの方を見る。
大輪の花のような、美しい笑顔だった。目が笑ってない点を除け
ば。

「今度あたしをその四文字で表現しやがったら手抜きなく手加減
なしでくびり殺してやっからな」

「すみませんでした！」

即座に謝った。

恐るべし哀川さんの読心術！

心の中で思っただけなのに何故か謝らなければいけない理不尽に
首を傾げたくなったが、不機嫌モードの哀川さんを刺激するのもよ
ろしくないだろう。

そもそも、今はそんな場合じゃない。

「ふん。待ってりゃその内俺の敵は来るだろうと思ってたが、俺の
娘まで一緒とはな。まあ、その結果の、この速さって事か。まあど
ちらにしても、都合がいい」

「……………」

狐面の男、西東さん。

哀川さんに言わせれば、今回の模倣殺人の主犯格な訳だが、いやに神妙だ。

どころか、ぼく達の来訪を待っていたかのような口ぶりだ。

あるいは、待っていたからこそ、この分かり易い場所に留まっていたという事か。

ならば、ぼくは西東さんに、自分の推測が合っていたのかどうか、確かめてみた。

「やっぱり、今回のこの零崎の模倣は、狐さんの意思によるものじゃないんですね？」

「……ふん」

狐さんは、否定しない。

「ついこの間まで、貴方はぼくと交戦状態にありました。その時貴方には、こんな騒ぎを起こすような素振りは一切無かった。それこそ今回の事件の実行犯が“殺し名”に匹敵するプレイヤーだと言うなら、ぼくとの戦闘で出し惜しみする理由もありませんでしたし。それに、潤さんから今回の話を聞いた時、おかしいと思っていたんです」

ぼくが感じていた、違和感。

狐さんの仕業と断ずるには、アリバイという以外に、本質的な違和感を感じていた。

「西東さんは、例え最終的に無関係な人間に被害をバラ撒くにしても、ここまで直接的に、一般人を手に掛けるようなやり方はしないと思っただんです」

自身の周囲には、普通と呼べる人間は存在しない。

故に、権力の世界にも財力の世界にも暴力の世界にも属さない、普通と呼ばれる一般人に対する西東さんの態度には、一種の畏敬のような感情さえある。

かつて十三階段にいて、例外的に普通の感性しか持っていなかった頭巾ちゃんを「最高」と評した狐さんが取る方法とは、とてもじゃないが思えなかった。

「『一般人を手には掛けるようなやり方はしないと思っただんです』。ふん。随分と見くびられたもんだな。まあ確かに、今まではそうする理由も無かったし、やろうとも思わなかったからな。またそうする事に価値があるとも、思わなかったしな。そういう意味じゃ、この件は俺の本位じゃねえ。それどころか、俺の手足共が勝手な事ばかりしやがって困っちまってんだよ。なあ、俺の敵。それに、俺の娘」

助けてくれよ、と狐面の男は言った。

「ちよつとタバコ買ってきてくれよ」とでも言うような、気軽な言い方だった。

「……ちっ」

当然と言うかやはりと言うか、その言葉が癪に障ったようで、再び哀川さんの舌打ちである。

「てめえ、勝手な事ばっか言ってんじゃねーぞクソ親父。てめーが困ろうがどうしようが、全部てめーの自業自得だろうが」

「『全部てめーの自業自得だろうが』。ふん。だったらどうした？ お前らも、今の状況を放っておきたい訳じゃあるまい？」

今の状況。

京都に、四年前の悪夢が再現されている、状況。

「だったらこの事件を解決する事と、俺を助ける事は、同義だ。それとも、請負人が依頼人を選ぼうって言うのか？」

「くっ、このっ……！」

相変わらず、哀川さんは父親には頭が上がらないようだった。何年経とうと、親子は親子という訳か。

まあ、そんなにほのぼのとした関係でもないだろうが。

「あなたが自分を依頼人だと言うのなら、ちゃんと事の詳細を説明してもらえるんですよね？」

「『ちゃんと事の詳細を説明してもらえるんですよね？』。ふん。俺もハナからそうするつもりだったさ」

狐さんの言い方に、哀川さんは「ケツ」と吐き捨てるような声を

出した。

人類最強、キャラ変わり過ぎである。

「察しの通り、このバカ騒ぎは、俺の手足が勝手に暴走しちゃったが故に起こっている。今京都で暴れて回ってる手足、そいつ、黒四コクシ館カンシメ一つっーんだけどな」

「黒四館……その人が、今回の下手人なんですか？」

「『その人が、今回の下手人なんですか？』。ふん。そうだと言やそうだが、違うと言や違うな。こいつはただの、狂った学者だ。本人は『リーダー験求者』とか名乗ってやがったがな」

「学者、験求者、ね。要は喜連川博士の同類みたいなもんか」

哀川さんが口にした、喜連川という名前、ぼくにも少し聞き覚えがあった。

『殺し名』序列一位。勾宮雑技団の殺し屋達を“創った”という、マッドサイエンティスト。

「『喜連川博士の同類みたいなもんか』。ふん。まあ、浅からぬ因縁があったとかどうとか聞いた気もするが、今はそんな事、どちらでも同じことだ。問題は、そいつの創り出した“不世出の怪物達”が、もう俺には手に負えねエ代物だって事だ」

「……不世出の怪物？」

「ああ。あの野郎は『夢浮橋』とか言ってたな」

夢浮橋。

帚木三帳、玉鬘十帳、勾宮三帳、宇治十帳からなる源氏物語の、最終巻。

「はぁん、あの勾宮雑技団の分家の中でも、一際存在を秘匿されてる奴らだな。確かに不世出じゃあるかもしれないけど、つっても分家は分家だろ？」

怪物と呼ぶには足りない、哀川さんは言う。

概ね、ぼくも同意見だった。

同じ『勾宮』の分家なら、ぼくの請負人稼業を手伝ってもらっている子に、濤標深空ちゃんと濤標高海ちゃんという姉妹がいる。

彼女達は双子のコンビネーションによって多彩な合気術を操る殺し屋である。

それは確かに脅威ではあるのだが、それでも勾宮本家、また他の『殺し名』達と比べると見劣りするというのが正直なところだ。

だから今回も、下手人探しを手伝うと言ってきてくれた彼女達の好意を、ぼくはやりわりと却下して留守番させたのだ。

下手人はともかく、問識くんの殺人衝動の標的にされてしまったら、彼女達と言えど無事では済まないだろうから。

「『怪物と呼ぶには足りない』。ふん。そう結論を急ぐな。こちらからものを頼む以上、基本情報はちゃんと提示してやっから。反論なり愚痴なりはその後言いやがれ」

西東さんはここで一杯日本酒をあおった。

猪口に入っていた分を飲み干すと、話の続きを始めた。

「確かに『夢浮橋』そのものは、ただの勾宮の分家だ。戦闘能力も他の分家とそこまで差がある訳じゃねえ。だが『夢浮橋』の奴らには、他の分家には類を見ねえ特徴があつてな。それは、“質より量

”に主眼を置いていたって事だ」

「質より、量……」

「本家にしても分家にしても、勾宮の連中は人為的にその強さを形成されている。その時、奴らは大抵、“兄弟姉妹による変則的な戦術”を行えるよう仕込まれている」

同じ身体に強さと弱さを別々の人格として分離させた、出夢さんと理澄ちゃん、殺戮奇術の勾宮兄妹を始め、

『勾宮』の頂点とも言える、五人の身体に一つの精神を宿しているという『断片集』《フラグメント》、分家で言えば、濤標深空ちゃんと高海ちゃんのコンビネーションもそうだし、

聞いた話では『早蕨』という、太刀、薙刀、弓矢でオールレンジを補う三人兄妹や、二人の姉と一人の妹の人物誤認トリックを仕組んだ『総角三姉妹』なんてのもいたらしい。

どのコンセプトを取っても、際物としか言いようが無い。

しかし実際にそれらと敵として相対した時、そのどれもが突破困難な脅威である。

「で、『夢浮橋』はその中でも、群を抜いて奇抜でな。さっき言った“質より量”、それを極端な形で再現してやがんのさ。

何せ総勢、100人兄弟だっつーんだから、飛びきりだよな」

「ひゃ、ひゃく人!？」

あまりに突拍子な数字に、思わず声を上げてしまった。
西東さんはぼくのリアクションには構わず、続けた。

「まあ、本当に生殖で生まれた兄弟なのかは知らんがな。とにかく、数だ。ある程度の戦闘力を持ったプレイヤーをその規模で量産できりゃ、殺し名としての戦力維持や控え要員の確保も容易だからな。それに、実戦要員としても、他のプレイヤーには類を見ないモチベーションで戦えたようだな」

即ち、

“自分が死んでも、代わりは幾らでもいる”という、心境。

「こいつは死地において、意外と有効に作用してな。自分がどんなに追い詰められていても、“代わりはいる”と確信できるから、身体から余分な力みが抜ける。自然、パフォーマンスも向上する。そして死んだら死んだで、どうせ代えも効くしな。『夢浮橋』としての痛手にゃならん」

西東さんは、そんな“個人”の人格を否定された『夢浮橋』という殺し屋の有用性を、その最悪の唇で、朗々と語る。

「で、夢浮橋の統率者にとって最も有用なのが、“捨て身”つつー戦法を、こいつらなら簡単に実行できるって事だ。作戦上、必ず自分が死ぬような役割を割り振られても、実行役は“どうせ代わりはいる”と思ってるから、何の気負いもなく命を散らせる。まあ、ていの良い鉄砲玉だな」

西東さんはまるで、量産型のロボットの話でもしているかのよう

に語っているが、ぼくは身の毛がよだつ思いだった。
自分の代わりが“本当に”いると知っている殺し屋。

『夢浮橋』という、ギルドとしての利益のために、簡単に自分の命を散らす。

おそらくは、そんな風に改造されているのであろうが。

だとしたら、その『夢浮橋』に所属する殺し屋は、本当に“人間”なのか？

そして、そんな夢浮橋を運用している奴らも、「本当に人間なのか？」と、別の意味で問いたくなる。

と、西東さんはそこで、肩を竦めるようにして、話の調子を少し軽くして続きを話した。

「つつても当初は『夢浮橋』の中でまともに戦えるのは十数人程度だったらしい。他の兄弟たちはまあ、本家の実験材料扱いだったようだな」

「じ、実験材料って……」

「そもそも『夢浮橋』ってのが、本家の私有物みてーになってるようだな。生殖、量産に特化させたのも、実際は戦闘における優位性の追求と言うよりも、人体実験用の素材確保のためっつー本家側の都合だったようだな。存在が秘匿されてんのもまあ、その辺が理由なんだろうぜ」

聞いている、気持ち悪くなる話だった。

『夢浮橋』。源氏物語の中でも唯一、登場人物の名前ではない名詞が冠された巻。

本来、存在しないはずの人間。

そんな名を持って生まれ、実験体にされる人間が、この世にいるというのか。

「ふん。ともかく、『夢浮橋』つーのはそういう集団だ。そして、この組織を丸ごと譲り受けたのが、勝手に俺の手足になっていた黒四館の野郎だ。奴のやる事は大概、俺の猿真似じゃあったが、能力はそこそこあった。少なくとも、『神理楽』《ルール》の後ろ盾を得られて、喜連川博士と並び称される程度にやあな。で、奴は複製の効く夢浮橋を素体に、『怪物の量産』を目論んだ」

それは、かつて西東天、架城明楽、哀川純哉の三人が『人類最強』哀川潤を製作し、

ER3システムの内部組織MS-2が『人類最終』想影真心を製作したように、

黒四館一もまた、世界を終わらせるための“限界を越えた存在”の製作を目論んだという事か。

「ま、俺としては数あるコネクションの一つぐらいの認識だったんだが、時刻の奴が何かと目をかけていたようだな。夢浮橋の改造にも、時宮の技術を提供していたらしいな」

「そういう裏事情はどーでもいいんだよ。要するにアレだろ？ 悪の科学者が世界征服しようとしてるってだけだろ？」

話の流れを完全にぶった切る形で、哀川さんが割り込んできた。

「どうやら、話の聞きっぱなしでフラストレーションが限界値まで溜まってしまったようだった。」

「だったらその黒四館ってやつ、ちょっくらぶっ飛ばしてくっから、テメーはとっととそいつの居場所吐けばいいんだよ」

「『とっととそいつの居場所吐けばいいんだよ』。ふん。居場所は、吐くまでもないんだがな」

「ああ？」

「まあ聞け。ここからが話の肝だ。俺は以前、気まぐれに奴の元を訪れた事があった。一年ぐらい前の話だ」

一年前。

ぼくと問識くんが、出会った年でもある。

関係ないと思うが、因果なものだとは思う。

「そんな時、素体に組み込む遺伝子のサンプルが欲しいとか言ってきたやがってな。まあ、俺もその頃は破壊活動の種も枯渇して、行き詰ってたからな。軽い気持ちで渡した訳だ」

「俺の娘。お前の遺伝子をな」

「は、はあっ!？」

哀川さんが顔まで赤くしてうろたえた。

ぼくもそれなりに驚いたけど、むしろこんなレアな哀川さんを見た事の方に驚いた。

「そ、そんなもん何時の間にっ!」

「四年前の十月だったか。真心にやられて意気消沈していたお前とランデブー決め込んでる間に、髪の毛を数本抜いておいたんだよ」

「ムカつく言い方すんなっ!」

哀川さんが羞恥に呻いている。

出来るならもうしばしの間、彼女の弱った姿というものを目に焼き付けておきたかったが、あまり引き延ばすと復活した後が怖いので、ぼくは話の続きを促す。

「それで、哀川さんの遺伝子を組み込んだ『夢浮橋』は、どうなったんですか？」

「『どうなったんですか』。ふん、まあ結論を言えば、大分研究は捗ったようだな。その過程で失敗作も相当量生まれたってのは言うまでもねえ事だろうがな。しかしそれでも、最強と最終を打倒し得る程度の戦力を得て、こうして攻撃を仕掛けられる程度には、上手くいったんだろうぜ」

と、

西東さんが言葉を区切った瞬間、部屋天井が爆発した。

「――!?」

そして天井から哀川さんに向かって、黒い人影が降ってきた。

人影と哀川さんが、衝突する。ばきっ、と、嫌な音が響く。

「ぐっ!？」

咄嗟に腕をクロスさせて人影の攻撃を防いだ哀川さんだったが、今の音を聞く限り、防御に使った腕は折れてしまったのだろう。

そして体勢を崩した哀川さんの上から、人影による第二撃。

人影の拳が、哀川さんの腹に直撃し、そのまま床へと叩きつけられ、

床の底が砕けた。

「っ！　じゅ、潤さん!？」

フロアの床が破壊され、人影と共に下階に落ちる哀川さん。

そしてレストラン内が、戦塵で充滿する。

周囲にいた他のお客さんやウエイトレスは、突然巻き起こった爆弾テロレベルの戦闘に、悲鳴を挙げるやら混乱するやらで忙しなく動き始めた。

請負人たるぼくとしては、一般人を巻き添えにしないよう動くべきだったが、哀川さんが吹っ飛ばされたショックで足も頭も動かなかった。

「やれやれ、いきなり派手にぶちかましおって。さながら範馬の親子喧嘩じゃないか」

「っ!？」

しかしぼくは、すぐに正常な思考を取り戻した。

否、この侵入者の言葉によって、取り戻させられた。

赤紫色のワイシャツの上から白衣を着た、初老の男。

右目には金縁の片眼鏡を付けていた。

そしてこの騒ぎの渦中において唯一、この男は笑っていた。

とても愉快そうに。この状況を望んでいたかのように。

恐らく、否、十中八九この男が――

「尤もこの場合、親より子の方が強いようだがね」

「一。やらかすなら合図くらい送りやがれ。埃でポン酒がダメになるところだ」

と、一人状況を観察している男に、不機嫌そうな声が投げかけられた。

見ると、瓶を抱え込むように持ち、その口を手で押さえている西東さんの姿があった。

「おお、これは失礼致したな先生。ほんのわずかでも前触れを見せてしまえば、真紅に勘付かれる恐れがありましたゆえ。まあ、正面からやり合っても“黒子”が負けるとは思いませんがの、これも万全を期すためですよ」

「『万全を期すためですよ』。ふん」

俺の娘を倒すのに、万全で足りるってか。

と、西東さんは小さく呟いた。

そして、その言葉を聞きとれなかった男は、今度はぼくに気付き、にこにこ笑みを浮かべながら近づいてきた。

「貴方が、“いーちゃん”ですね？　先生が“敵”と称されている、戯言遣い」

「……はい」

正直、哀川さんは心配だったが、ぼくはこの男と向き合わなければならぬらしい。

せいぜい、言葉を弄して時間を稼ぎ、情報を引きずり出してやろう。

殺して解して並べて揃えて、曝してやろう。

この男の邪悪な笑顔を見て、ぼくはそう思った。

「はじめまして。黒四館一さん」

其の捌（前書き）

遅くなりました！

待っていてくださった皆様方には申し訳ありません！

そこまで待ってなくて「あ、何だ更新しやがったのか遅筆野郎」的マインドな皆様方には「ああそうだよ更新したったよオンドリャー」的な言葉を（

そしてこれから読んで下さる皆さまには、等価の感謝を！

其の捌、お楽しみ頂ければ幸いです。

其の捌

8、

「……っ！」

夢浮橋時宗が息絶えた直後だった。

その気配は、背後に現れた。

正に、突然。

一瞬前まで全く存在していなかった気配を、背後に感じた。

それも、ただならぬ膨大な、殺気。

今の今までそこにいなかったとは思えぬ程の、存在感だった。

これまで二人の刺客——零崎人識の模倣を行っていた殺し屋、夢浮橋伊刈と夢浮橋時宗——と相対し、手堅く、危なげなく、勝利を収めてきた問識だったが、この三人目を“感じ取った”瞬間、その表情から余裕が消えた。

「『夢浮橋三人衆』が一人。夢浮橋法師」

振り返ったその場所に、一人の少年が居た。

上半身には何も纏っておらず、下には黒のダメージジーンズを履き、そこに多種多様なシルバークセの数々がじゃらじゃらと音を鳴らしている。

両手には、日本の警察官が扱う警棒程度の長さの、鉄パイプを一本ずつぶら下げていた。

ボサボサに伸びた黒髪が顔の大半を覆っており、その表情は伺い知れない。

それでも、問識に向けられた、溢れんばかりの殺意は、ひしひしと伝わってくる。

「お前を、殺すっ！！！」

問識が落ち着いて観測できたのは、そこまでだった。

宣言から一瞬で距離を詰めた法師が、右手の鉄パイプで袈裟がけの一撃を放った。

「くっ！」

その速さに面喰いつつも、その攻撃を半歩下がって避ける問識。

こちらからもチェーンソーで仕掛けるべく構えかけた問識だったが、右の返す攻撃が側頭部を狙ってきた。

それを身体を逸らせて回避すると、今度は左手の鉄パイプが顔面目掛けて突き出される。

これをとっさに『刀狩令』のハンドル部分で受ける問識。が、衝撃を殺しきれず、身体を後方へ吹っ飛ぶ。

衝撃軽減のために自ら飛んだ面もあるが、それでも一気に10メートル以上の間が開いていた。

（重い……！！）

少年の体格からは想像も出来ない程の重い打撃。先刻の伊刈との戦闘で受けた鞆の攻撃など比較にならない。

もしも一撃でも機関部にまともに食らえば、それだけで破碎され

かねないだろう。

そこを法師はさらに追撃をかけ、クロスチョップの要領で両手の鉄パイプを挟み込むように振り下ろす。

（これをかわせば――！）

両手を同時に攻撃に回せば、その後の防御が疎かになると見て、問識はカウンターを狙うべく『刀狩令』を構えてエンジンを入れる。そして鉄パイプによる挟撃を身を屈めて避けた問識は、そのままチェーンソーの刃を振り上げようとした。

しかしその前に、法師の蹴りが問識の顔面を襲った。

「うっ!？」

鉄パイプによるクロスチョップの方に大分重さが乗っていたはずなのに、一瞬でその勢いを蹴りに転じていた。

そのまま空でも飛ぶのかという程の、思い切りの良さである。

しかしその蹴りが届く寸前で辛くも反応した問識は、攻撃の勢いを自ら殺して地面に転ぶようにして、無理やり蹴りを回避。

そして『刀狩令』のエンジンを止め、転がりながら法師から距離を取ろうとする。

だが法師の方も蹴りが外れると見るやその足を地面に叩きつけ、その足を軸に強引に体勢を立て直し、問識の元へ肉薄する。

攻守が、一向に入れ変わらない。

戦いの流れは、完全に法師の側にあった。

「くっ……!」

問識は、戸惑っていた。

法師のバトルスタイルは、とにかく雑だ。

攻撃一辺倒。ただ闇雲に、鉄パイプを振りまわしているだけと言ってもいい。

こんな攻撃、プロのプレイヤーにとっては造作もなく避けられ、それどころか一振り目をかわした瞬間こちらからカウンターを食らわせて一発KO出来る、はずだった。

しかし法師の攻撃は、速い。一撃一撃の速度が、尋常ではなく速く、重いのだ。

鉄パイプ故の軽量性がその速度を生み出しているのだろうが、それだけでは打撃に重さは伴わないはずだ。しかし実際に攻撃をガードした問識の腕には、未だにビリビリと、決して弱くない手の痺れが残っている。

そして法師はとにかく、動く。攻める事のみを考え、他の思考を一切取り払ったかのように、動くのだ。

それに加えて、その動きというのがとにかく変則的なのだ。追撃のためならば例え無駄に体力を使う動作であろうとも、法師は躊躇なく動く。

故に読みをずらされ、こちらの反応は遅くなる。

動きの精密さに加え、その運動量も凄まじい。プロのプレイヤーから見えてさえ、明らかにオーバーペースに見える程に。

ただの激情ゆえの暴走なのか、あるいは体力の高さこそが法師の特性なのか、それはまだ分からないが。

しかし、そんな予想外に高い戦闘力以外にも問識は戸惑っていた。

三人衆の最後ともなれば、これまでの二人の戦闘の経緯を見てもおかしくない。ならば、何故何の対策も練らず、こうも果敢に攻撃してこれるのかという話だ。

殺し名のスキルで攻めようと、呪い名のスキルで責めようと、問識はまるで等価に対応する。何の策も打たず、ただ正面から攻めてくるような真似が通じるはずがないのは、見ていれば分かるはずなのに。

と、考えてる今、実際には法師のスキルとも言えないような暴力に押されているのだから世話ないが。

しかし、三人衆の内、二人がやられているという事を鑑みて、撤退するという選択肢は無かったのだろうか？

（そもそも、死色の真紅じゃない僕を、どうしてここまで執拗に攻撃してくるんだ……？）

二人目の対戦相手、夢浮橋時宗との会話から、この三人組の標的が“死色の真紅”だという事が割れた。それに、よく考えると一人目の夢浮橋伊刈も、出会い頭に言っていたのだ。「思わず誘い込んじゃったが、何だ。死色の真紅じゃねーじゃねえか」と。

標的ではない敵を誘い込んだのは、邪魔者を潰しておくためだったのだろうが、しかしその邪魔者に既に二人殺されている以上、ここで撤退するのが吉と考えるべきではないのか。

既に“死色”対策のトラップは問識に応戦するために消費し尽くされ、死色を相手取る体勢は瓦解していると言っているだろうか。ならば今は退いて、また別の機を待つべきじゃないのか。

しかしそれをせず、問識に無駄な戦いを挑む、理由は――

（と、色々考えてみたけど……）

（多分あれだな。これは――）

（――この“身体の気だるさ”が、気のせいじゃない、ということだ）

問識は、戸惑っていたのだ。

一戦目、二戦目と、あまり派手に動き回らなかったから気づくのが遅れていたが、どうにも身体が重いのだ。

それを自覚して思い返せば、一人目の夢浮橋伊刈を倒した後辺りからの症状のようだ。

おそらくは、毒。

気化した毒を吸い込むなり何なりして、それが今になって効き始めているようなのだ。

（そう言えば、二人目は、）

（一人目を倒死た場所から、僕が離れてから襲ってきたな）

つまり、奇野の感染血統もどき、といった所か。

おそらくは、死に際の自決。自らの首を切るという愚行。

あれは血液か何かに仕込んだ毒を、問識に浴びせるための行為だったのかもしれない。

再改造された、と言っていた。

そして、実際に『時宮』のスキルを使う奴もいた。

ならばこいつらの改造主は、体内に毒を仕込む『奇野』のスキルを入手する方法も持っていてもおかしくない。

（恐らく、伊刈を負かした人間に毒を浴びせて、標的を弱らせる）

（そういう死掛けだったのかも死れないな……）

非致死性の毒なのは、伊刈、あるいは夢浮橋の最後の矜持だったのかもしれない。

『呪い名』のスキルを使いはあるが、最後に殺すのは『殺し名』のスキルで、とか。

（まあ、）

（ものの見事に引っ掛かっている僕には、）

（そのこだわりを嘲る権利は無いんだけどね）

一人目が死ぬ事によって、二人目、三人目の襲撃の成功率を上げる。

たった一人を相手にする事を想定した、夢浮橋三人衆。

たった一度しか発動する事が出来ず、二度目の発動を想定すらしていない、鉄砲玉のような罠。

（……そうか）

（なら、）

（発動死たが最後、途中では止められない、という事か）

止めれば、それは二人の死を無駄にするという事。

だから、例えばその死が失敗だったとしても、最後まで戦う。

そういう、モチベーション。

あるいはそれこそが、“死色の真紅”哀川潤を打倒するための、最後の切り札だったのかもしれない。

（……ん？）

と、

問識が自分の思考にちよつとした違和感を感じた、直後。

「死ねっ!!」

「……っ!？」

今まで最小限の動きで回避行動を続けてきた問識の防御が、崩れた。

両手の鉄パイプで同方向から袈裟がけに叩きつけられた攻撃を『刀狩令』で受けたが、その瞬間その『刀狩令』に向けて直接横殴りの蹴りが放たれたのである。

その衝撃で『刀狩令』は問識の手を離れ、5、6メートル程地面を転がった。チェンソーとしての機能が生きてるかどうか、問識がそんな心配をする間も無く、法師の鉄パイプが問識の腹に入る。

「ぐ、ほあっ……!!」

この一発で、問識はほぼ戦闘不能状態になった。

攻撃の勢いで2メートル程後方まで身体がふっ飛び、受け身も取れずに背中地面に衝突する。

問識は戦闘能力は高くとも、元『死神』である問識の肉体は、攻撃を受ける事に慣れていない。この四年間で少しはマシになったものの、未だに強い打撃を受けると簡単に戦闘不能になってしまうのである。

「……………」

法師はそんな問識を見下ろし、歩きながら近寄ってくる。

問識は何とか顔を上げ、そんな法師の表情を見る。

勝利の余韻は何処にもなく、ただただ、憎しみの表情を浮かべていた。

そしてそれ以上に、悲しみをたたえた顔だった。

「……殺してやる。伊刈兄貴と時宗兄貴の、仇」

問識は、法師のそんな表情を見て、嫌が応にも思い出す。

（あの時と、同じだ……）

四年前。

今は兄である零崎人識と、最初に戦った時の事を。

圧倒的優位にあった問識を、人識は“家賊を守るため”という理由のみで立ち上がり、そこからたった二撃の拳で、問識を制圧した。

（目の前の敵すらも目に映らず、その先にあるもののために戦う者……）

そうだ。

問識は、ずっと知りたかったのである。

あの時、あの頃の自分を打ち負かした、あの二発の拳の正体を。死神すらも打ち負かす、あの力の正体を。

この夢浮橋法師の攻撃は、少し“あの時の拳”に、似ていたのだ。

（……まあ）

（毒も、かなり回って来たようだ死、）

（ここまでだな）

もう、動けそうもない。

零崎問識は、静かにそう考え、法師の攻撃を待った。
そして間もなく、法師が問識の真上に現れ――

「どいつも、こいつも……」

呟いた。

ありったけの殺気と、怒気を込めて。

しかしその目に、先刻までの狂気はなく、理性的な光すら湛えていた。

「命を、なんだと思っていやがるんだ……」

それは、

今までの二人の『夢浮橋』を見ていた問識にとって、
意外な台詞だった。

二人とも、死んだ。

問識のせいで、死んだ。

だから、三人目である法師が問識に対し、その言葉を吐く事に不自然はない。

プレイヤーの価値観的には甘ちゃんもいい所だが、それでも、そんな事を言う奴がいない訳ではない。

それを、問識はこの四年間で学んでいる。

しかし、

どいつもこいつもと、法師は言った。

それは、誰に対して言ったものだろうか。

と、物思いに耽れたのもそこまで。

気づけば法師は、再びその目に狂気を浮かべ、問識を睨みつけていた。

「死ね、零崎！」

そう言って鉄パイプを振り上げるのを見て、問識は「いいよ」と言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7063x/>

零崎問識の人間問答

2011年11月29日15時50分発行